

第1章

北海道における安心安全な地域づくり検討部会 (北海道部会)の報告

第1章 北海道における安心安全な地域づくり検討部会(北海道部会)の報告

北海道部会の概要

北海道部会 委員構成

座長	原文宏	社団法人北海道開発技術センター 理事
委員	須田 力	北海道大学 名誉教授
	赤城 由紀	札幌国際大学 助教授
	根子 俊彦	財団法人札幌国際プラザ 札幌コンベンションビューロー 次長
	三浦 春菜	首都大学東京大学院

北海道部会の経過

- ・第1回検討会議 平成18年12月6日 16:00~18:15 於：北海道開発技術センター
- ・第2回検討会議 平成19年1月10日 15:00~17:00 於：北海道開発技術センター
- ・第3回検討会議 平成19年3月6日 13:00~15:00 於：北海道開発技術センター

北海道部会の検討課題

- <課題1> 高齢者世帯の空き部屋を利用した交流と除雪支援の仕組みを構築する(可能性検討)
- <課題2> 地方の高齢者世帯の除雪支援を行う仕組みを構築する(可能性検討)
- <課題3> 地域主体で実施している雪対策についてその実態を把握する

調査及び実証実験の内容と成果

	テーマ	内容	成果
課題1	ホームステイ型 除雪支援実験	道外の留学生などにホームステイを してもらい、滞在先の家の周りの除雪 を行う。	「除雪」がホストファミリーの求める 「異文化理解」や「交流」を深めるき っかけとなり、特に高齢のホストファ ミリーに対する除雪支援として有効 である。一方、ホストファミリー未 経験世帯に対しては実施が困難である。
課題2	ホームビジット型 除雪支援実験	上富良野町の高齢者世帯の除雪支援 を行うためのバスツアー「雪はね体験 隊！」(体験・交流型)を実施する。	除雪ボランティアだけでなく、地元の 受入側も含めた「参加者」の交流の密 度が、プログラムの満足度を高めてお り、新しい除雪支援の取組として有効 である。
		岩見沢市栗沢町の高齢者世帯の除雪 支援を行う「雪かきボランティア」を (支援型)実施する。	短い募集期間にもかかわらず、参加者 (大学生)が集まり、豪雪地の高齢者 世帯の除雪を実施。参加者のボラン ティア意識に応じた効率的な募集体制 が期待される。
課題3	地域主体の雪対策 実態調査	札幌市福祉除雪事業と澄川地区にお ける中学生の除雪ボランティア活動 の実態を調査する。	「地域の支えあい」や「地域福祉活動 の推進」を担う人材育成の一環として 中学生ボランティアの参加は有効で ある。

地域と連携した仕組みづくり

「ホームビジット型除雪支援」は、短期的な成果を上げることができる取組として有効である反面、一過性のボランティア活動となり、継続性のある「雪処理の担い手」育成に結びつかない可能性がある。そのため、福祉除雪事業といった、身近な地域でのボランティア除雪活動が受け皿となり、日常的にボランティア除雪活動ができる仕組みづくりが重要である。

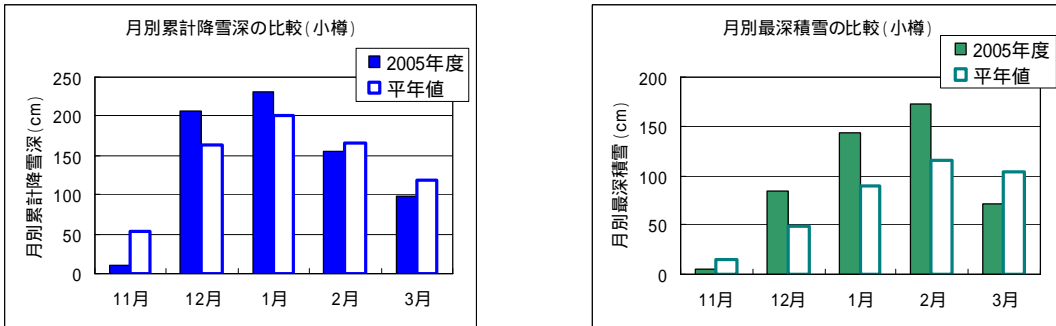
1 - 1 北海道の地域概況

1 - 1 - 1 平成 18 年豪雪の降雪状況

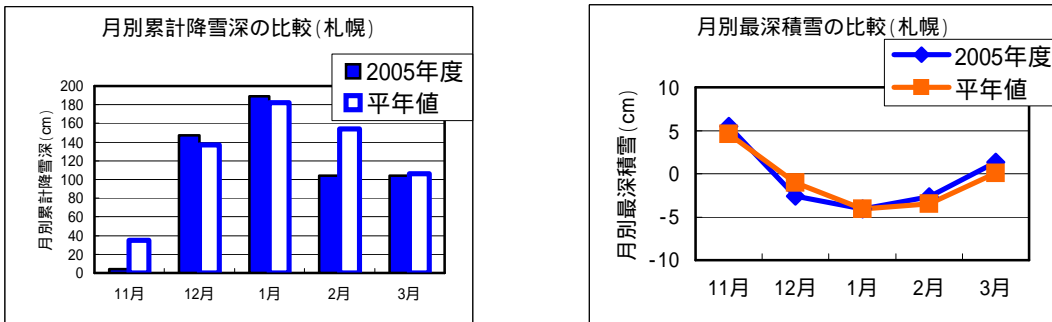
平成 18 年豪雪では、北海道の道南、道央、道東を中心に多くの地域で大雪となった。小樽では 12 月、1 月の降雪量が平年に比べて多く、その影響で 12 月から 2 月までの最大積雪は平年値を大きく上回っている（図表 1 - 1）。

また、札幌でも 12 月、1 月を中心に降雪量が多く、年度別にみても降雪・積雪ともに過去 30 年の平均を大きく上回り、平成 16 年度に続き、2 年連続の大雪となった（図表 1 - 2、1 - 3）。気温は 12 月が平年値を下回り寒い日が続いたが、1 月以降は平年並みからやや暖かくなった。

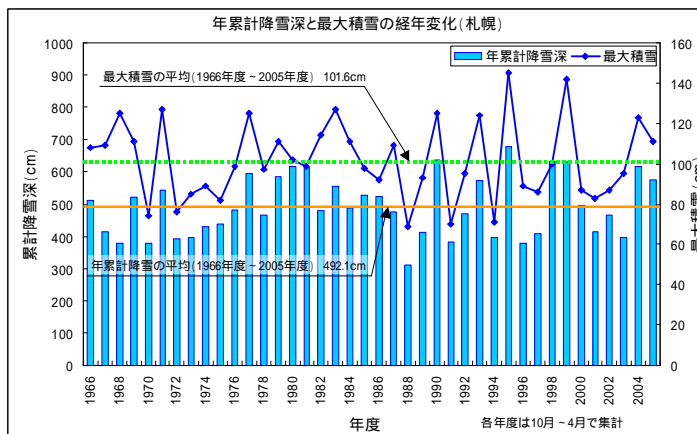
図表 1 - 1 小樽市の降雪・積雪状況（H17 年 11 月～H18 年 3 月）



図表 1 - 2 札幌市の降雪・気温状況（H17 年 11 月～H18 年 3 月）



図表 1 - 3 札幌市の降雪・積雪の経年変化状況



資料：北海道開発局

1 - 1 - 2 北海道の気候

1月の北海道の平均気温は、各地ともに0以下であり、最高気温の平年値でも概ね0以下となっている(図表1-4)。最低気温の記録としては、旭川で-41.0、帯広で-38.2などを記録しており、札幌でも-28.5を記録したことがある。

図表1-4 主な都市の気温の平年値(1月)

	札幌	函館	旭川	釧路	帯広	網走	留萌	稚内	根室
平均気温()	-4.1	-2.9	-7.8	-5.6	-7.7	-5.9	-4.7	-5.0	-4.0
最高気温()	-0.9	0.4	-4.0	-0.9	-2.0	-2.8	-1.5	-3.0	-1.4
最低気温()	-7.7	-6.8	-12.6	-11.4	-13.9	-9.8	-8.2	-7.2	-7.4

資料：理科年表 1971年から2000年までの平均値

積雪量をみると、主な都市の中では旭川が最も多く、年間降雪量の平年値は756cmである。また、人口の最も多い札幌でも630cmの降雪がある。最大積雪の平年値は、札幌や旭川のような都市でも約1mである(図表1-5)。

積雪の記録としては、稚内199cm、帯広177cm、札幌169cmとなっており、都市部でも150cmを超える積雪を記録している。日降雪の最深値では、帯広で102cmを記録している(図表1-6)。

図表1-5 主な都市の降雪・積雪の平年値(全年)

	札幌	函館	旭川	釧路	帯広	網走	留萌	稚内	根室
降雪の深さ合計(cm)	630	398	756	187	214	373	736	697	235
積雪の深さ最大(cm)	101	45	96	41	62	54	95	83	33

資料：気象庁HP 統計期間：1971年～2000年

図表1-6 主な観測地点の最深積雪と日降雪の最深値

地名	最深積雪(cm)	出現年月日	日降雪の最深値(cm)	出現年月日
稚内	199	1970.2.9	60	1958.3.3
旭川	138	1987.3.4	62	1957.4.1
帯広	177	1970.3.17	102	1970.3.16
札幌	169	1939.2.13	63	1970.1.31
根室	92	1933.3.29	65	1960.1.17
倶知安	312	1970.3.25	64	1976.12.31
函館	91	1985.2.10	40	1957.3.6

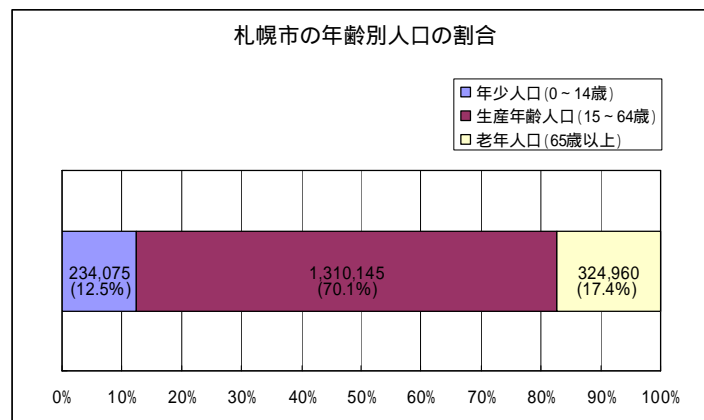
1 - 1 - 3 札幌市における高齢化の状況

北海道の総人口 562 万 7,737 人のうち、札幌市の人口は 188 万 863 人であり、約 3 分の 1 を占め、一極集中型である。

札幌市における高齢者人口は約 32.5 万人であり、高齢化率は 17.4% である（図表 1 - 7）。これは、北海道全体の 21.4% と比べると低い値である。また、札幌市における高齢者世帯数は、約 124,500 世帯である（図表 1 - 8）。

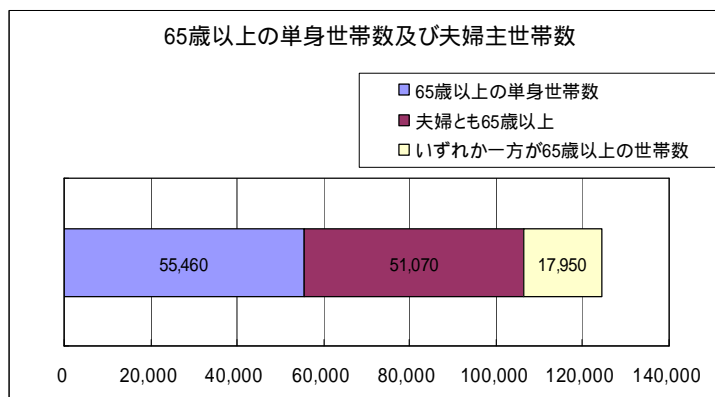
高齢者が生活の中で望んでいることを、平成 16 年 11 月に札幌市が実施した「高齢社会に関する意識調査（高齢者調査）」の結果から整理すると（図表略）「身体が弱くなったり、判断力が不十分になったときの暮らし方」では、約 7 割が在宅での生活を希望している。現在困っていることや不安では、「病気」（51%）が最も多く、次いで「年金」（29%）、「自分の介護」（25%）である。老後を安心して過ごすために行政に充実を求めることでは、「除雪体制」が 37.7% であり、「年金」に次いで多い要望となっている。

図表 1 - 7 札幌市の年齢別人口の割合（平成 18 年 4 月 1 日現在）



資料：札幌市 HP さっぽろ統計情報

図表 1 - 8 65 歳以上の単身世帯数及び夫婦主世帯数（平成 15 年 10 月 1 日現在）



資料：札幌市の住宅 - 平成 15 年住宅・土地統計調査報告書 札幌市 HP

1 - 2 北海道部会の実施体制と検討フレーム

1 - 2 - 1 北海道部会の実施体制

北海道における豪雪地帯の安心安全な地域づくりに関する検討に際して、学識経験者、行政担当者等からなる「北海道における安心安全な地域づくり検討部会」(北海道部会)を設置し、本調査に関する討議・議論及び成果のとりまとめを行うこととした。

本部会の構成メンバーは、図表 1 - 9 に示すとおりである。

図表 1 - 9 北海道における安心安全な地域づくり検討部会 メンバー構成

座 長		
原	ふみひろ 文 宏	社団法人北海道開発技術センター 理事
委 員		
須 田	つとむ 力	北海道大学 名誉教授
赤 城	ゆき 由 紀	札幌国際大学 助教授
根 子	としひこ 俊 彦	財団法人札幌国際プラザ 札幌コンベンションビューロー 次長
三 浦	はるな 春 菜	首都大学東京大学院
オブザーバー		
真 田	ひとし 仁	北海道開発局 開発監理部 開発計画課 開発企画官
小 松	まさあき 正 明	北海道開発局 開発監理部 開発調整課 開発企画官
水 戸 部	ゆたか 裕	北海道知事政策部参事 主査
安 達	たけし 竹 志	札幌市建設局 管理部 雪対策室 計画課 課長
事務局		
大川戸	たかひろ 貴 浩	社団法人北海道開発技術センター 地域政策研究室 首席研究員
新 谷	ようこ 陽 子	社団法人北海道開発技術センター 地域政策研究室 研究員
松 田	ひろたか 浩 敬	社団法人北海道開発技術センター 地域政策研究室 研究員
諸 橋	かずゆき 和 行	財団法人日本システム開発研究所 第二研究ユニット次長

1 - 2 - 2 北海道部会の検討フレーム

北海道の気象状況や人口、高齢化状況等を踏まえた上で、北海道には数多くの観光客が訪れること、人口が札幌を中心とした都市部に集中していること、すでに地域主体の雪対策事例があることなどを考慮し、北海道部会における検討課題を以下のように設定した。

< 課題 1 > 高齢者世帯の空き部屋を利用した交流と除雪支援の仕組みを構築する（可能性検討）

- ・ 高齢化、核家族化が進み、高齢者世帯の空き部屋が増加している。
- ・ 北海道の観光と結びつけた除雪支援の仕組みを構築できないか。

観光などで北海道へ来た若者が高齢者宅にホームステイして交流を深めるとともに除雪支援を行うことが可能ではないか



実証実験「ホームステイ型除雪支援実験」

- ・ 道外の若者に高齢者宅でホームステイしてもらい、アンケート調査等を実施。
- ・ 問題点・課題を整理し、効果的で持続可能な仕組みを検討。

< 課題 2 > 地方の高齢者世帯の除雪支援を行う仕組みを構築する（可能性検討）

- ・ 札幌に人口が集中しており、地方では過疎と高齢化が深刻な地域が多い。
- ・ 地方の高齢者世帯を支援する仕組みを構築できないか。

札幌在住または観光で来た道外の若者等によるホームビジット型の除雪支援ツアーが有効策になるのではないか



実証実験「ホームビジット型除雪支援活動実験」

- ・ 札幌以外の地方へ除雪支援ツアーを企画・実施。
- ・ 参加者や訪れた地域の方へのヒアリング、アンケート調査などを実施し、問題点・課題を整理。
- ・ 持続可能な除雪支援ツアーの方法について検討。

<課題3> 地域主体で実施している雪対策についてその実態を把握する

- ・ 現在でも、地域主体で高齢者世帯の雪対策を実施している例がある。
- ・ これらの実態を調査することにより、他の地域に参考となる仕組みを提案できないか。

地域主体の高齢者雪対策支援について実態調査し、
特徴や問題点・課題の整理をすることが重要ではないか



実態調査「地域主体の雪対策実態調査」

- ・ 札幌で行われている除雪支援活動の実態を調査。
- ・ 特徴、問題点・課題などを整理し、他の地域の参考となる仕組みを検討。

1 - 3 北海道部会の経過

1 - 3 - 1 第1回検討会議の開催

(1) 第1回検討会議の概要

日時：平成18年12月6日(水) 16:00~18:15

場所：社団法人北海道開発技術センター 会議室

出席者：

<座長>

原文宏 北海道開発技術センター 理事

<委員>

須田 力 北海道大学 名誉教授

根子 俊彦 財団法人札幌国際プラザ 札幌コンベンションビューロー 次長

三浦 春菜 首都大学東京大学院

<オブザーバー>

真田 仁 北海道開発局開発監理部開発計画課 開発企画官

北谷喜代志 北海道開発局開発監理部開発計画課 調査専門官

廣瀬 貴久 北海道知事政策部参事 主任

<事務局>

島多 昭典 国土交通省 都市・地域整備局 地方整備課 課長補佐

諸橋 和行 財団法人日本システム開発研究所 第二研究ユニット次長

大川戸貴浩 社団法人北海道開発技術センター 企画部地域政策研究室 首席研究員

新谷 陽子 社団法人北海道開発技術センター 企画部地域政策研究室 研究員

議事次第

1. 開会

2. 出席者紹介

3. 議事

(1) 検討部会の趣旨確認

(2) 話題提供

札幌市におけるホームステイの現状

健康づくりのための運動としての人力除雪

地域主体の雪対策について

(3) 北海道における実験内容(案)について

高齢者世帯と若者の協同居住による除雪支援

地域主体の雪対策実態調査

(4) その他 次回検討部会について

4. 閉会

(2) 第1回検討会議の討議内容

1) 検討部会の趣旨確認

- 豪雪に関して気象庁が正式に命名したのは過去2回しかなく、「平成18年豪雪」は「昭和38年1月豪雪」以来の命名となった。
- 高齢化が進んだ地域で除雪がままならない状況になっており、実際死者152名のうち、3分の2が65歳以上の高齢者であった。
- このような状況を捉えて、1月から懇談会を開催。家の雪かきについては、本来自分で処理するのが大前提であるが、高齢者世帯の場合、自らが処理しきれない状況もあり、地域で取り組んでいくことが必要である。つまり、地域の共助体制の確立、応援に来ていただく方の受け皿組織の構築、応援に来ていただく方の技術力向上や安全確保といった観点の体制づくりが課題であるなどの提言をいただいた。
- これらにどう取り組むか検討するため、「豪雪地帯における安心安全な地域づくりに関する調査業務」を発注。この調査では、全国4地区で実証実験をすることが大きな柱になっており、各地区での取組から、モデルづくりや課題の整理を行いたい。

2) 話題提供

) 札幌市におけるホームステイの現状

- 札幌市役所としては、1968年からホームステイ制度を全国でもかなり先駆的に始めた。2006年3月末までの約40年間で、延べ6,514名の受け入れをしている。現在受け入れ側の登録家庭は203あり、昨年度はその内144家庭が191名の受け入れをしている。
- 家庭に泊まるホームステイ以外に、ホームビジットという短時間の家庭訪問がある。1軒あたりに3、4名くらいがまとまって行き、その家庭と交流して宿舎に戻るスタイルで、除雪などにはこのスタイルも考えに含めて良いのではないかと。
- ホームステイの期間は、3泊4日が基本であるが、実際には大学生の留学などの場合に3ヶ月といった例もある。
- 受け入れ先への費用については、交通費としてプリペイドカードを渡すのと、3泊4日を越える場合については食費の実費分として1泊1,000円を渡している。
- ボランティア保険にも加入しているが、滞在が長くなると対象にならないため、注意が必要。
- 全国的に見ると北海道はホームステイをしやすい環境にあると言われており、ある程度ホームステイについての風土もあると思われる。
- 外国人、観光、ホームビジットなどをうまく結びつけ、事前の条件設定をしっかりとやれば、除雪などのプログラムはできるのではないかと。
- 高齢者世帯が核家族化してきて、最初建てた大きな家の子供たちが出ていったため、空いている部屋がある状況と札幌にはホームステイの実績があることを結びつけて、少しでも除雪の手伝いをしてもらいながら、交流人口が増やせるとおもしろいのではないかと。

) 健康づくりのための運動としての人力除雪

- 北海道では、過疎、高齢化、貧困、行政の財政悪化など、さまざまな不利を抱えている地域が多く、高齢者世帯への除雪支援は深刻な問題。しかし、本州での「スノーバスターズ」のような若者たちによる除雪ボランティア活動が希薄である。
- 豪雪高齢化地域で、どのくらいの体力があれば健康で生きていけるか、個人の問題だけでなく、地域の問題として考えていくことが大切。北海道において「総合学習」などで除雪ボランティアを行っている学校の多くは地方の学校であり、札幌市の進学校ではほとんどこのような活動は行っていない。教育的な問題として考える必要があるのではないか。
- 雪かきは、高い有酸素能力と筋力、パワーが要求されるが、運動としていい面と悪い面があるため、それについて科学的な根拠をしっかりと子供たちにも認識させる必要がある。
- 健康のためには、一定以上の体力（最大酸素摂取量：60歳代の男性で11メッツ、60歳代の女性で9メッツ）が必要である。これを発達・維持させるための運動強度としては男性で5.5メッツ、女性で4.5メッツ以上必要。人力除雪は、バドミントン（5.8メッツ）やテニス（6.5メッツ）と同等の運動強度に匹敵。
- しかし、人力除雪は腕を使った運動であるため血圧が上がりやすいことや、がんばって息を止めるときに急激な血圧上昇によって、血管や心臓に大きな負担がかかるなどの理由から、高齢者や心臓の悪い人には要注意である。このようなことも、道民や子供たちがきちんと知るべき教育的な必修知識であると思われる。
- 降雪は個人の体力を考慮してくれないから、一番大変なのは体力が劣る高齢女性である。元気な人の何倍もの時間を費やさなくてはならず、住民全体が科学的な理解を共有しながら、世代の違い、地域の枠を越えて全体解決を図ることが必要。
- 夕張のようなところへ、札幌の学生が出向いて、雪かきもスキーもやる、地域の子供たちとも遊ぶ。そのような雪の楽しみを共有する中で、観光だけでなく住民ともふれあうことが大切だと考える。

) 地域主体の雪対策について

- 社会福祉協議会が札幌で「福祉除雪サービス」を6、7年前から実施している。これは、高齢者や障害者世帯に対し玄関の家や出入り口を地域協力員が除雪を行うサービスで、通常、有償となっている。
- 澄川地区連合会の澄川中学は、その事業の中で平成13年からボランティアとして参加しており、朝学校へ行く前に無償で除雪を行っている。参加人数は毎年20名程度。
- 除雪車が出動するたびに、担当の家へ除雪に行くため、1シーズンで15回から20回除雪を行うことになり、かなり大変であるが、子供たちは冬を越してやり終えたときの達成感を感じ、またやりたいという希望者もいるという。また、お姉さんがやっていたので自分もやりたいという弟がいたりして、活動が受け継がれている。
- 澄川地区の基本的な考えを、鮭が海に行っても自分が生まれた川に戻って産卵することに例えて説明されていた。すなわち、澄川で育った子供たちが何十年か経って、そのうちの2割か3割の子供たちが帰ってきてここで育てたい。その思いを込めて町内活動を行っているとのこと。非常に長い目で子供たちを育てている。

3) 北海道における実験内容(案)について

- 東京などでは、若者2、3人が共同で住むゲストハウスがある。そのようなものと高齢者世帯を組み合わせて、コレクティブハウスに似た形がつかれないかとも考えている。ただし、今年の1週間程度の実験ではできないので、少し時間をかけて勉強していきたい。
- ホームステイやホームビジットという形では可能である。東京から札幌だけではなく、札幌から夕張のような地方へということもできたらおもしろい。毎年、冬になると除雪ボランティアバスが出るようになるとおもしろいのでは。企業のスポンサーがつく可能性もあるのでは。
- 除雪ボランティアに来てもらう人には、その人が雪国で除雪できるだけの体力があるかどうか、事前に体力チェックが出来るようにしたほうがよいのでは。その上で、やれる人が適切な場所で作業をできるような体制を整える必要がある。
- 除雪ボランティアについては、受け入れる側にも準備が必要。情報として何を発信すべきか、除雪作業の技術をどう伝えるか、除雪以外の交流など。
- 北海道として、団塊の世代を対象にした「北の大地への移住促進事業」を実施している。その事業で、北海道の生活体験をしてもらう「ちょっと暮らし」を受け付けている。このような団塊世代の人たちの活用も考えてはどうか。
- 実験と調査計画的には大まかに計画書の流れでやるが、その中身については本日の意見に基づいて最終的な実験計画を作成し、第2回の検討部会を開催したい。
- 次回は、12月末か1月上旬頃に開催したい。

1 - 3 - 2 第2回検討会議の開催

(1) 第2回検討会議の概要

日時：平成19年1月10日(水) 15:00~17:00

場所：社団法人北海道開発技術センター 会議室

出席者：

<座長>

原文宏 北海道開発技術センター 理事

<委員>

須田 力 北海道大学 名誉教授

赤城 由紀 札幌国際大学 助教授

根子 俊彦 財団法人札幌国際プラザ 札幌コンベンションビューロー 次長

三浦 春菜 首都大学東京大学院

<オブザーバー>

真田 仁 北海道開発局 開発監理部 開発計画課 開発企画官

小松 正明 北海道開発局 開発監理部 開発調整課 開発企画官

廣瀬 貴久 北海道 知事政策部 参事 主任

安達 竹志 札幌市建設局 管理部 雪対策室 計画課 課長

<事務局>

諸橋 和行 財団法人日本システム開発研究所 第二研究ユニット次長

大川戸貴浩 社団法人北海道開発技術センター 企画部地域政策研究室 首席研究員

新谷 陽子 社団法人北海道開発技術センター 企画部地域政策研究室 研究員

松田 浩敬 社団法人北海道開発技術センター 企画部地域政策研究室 研究員

議事次第

1. 開会

2. 出席者紹介

3. 議事

(1) 第1回検討会議 議事要旨確認

(2) 北海道における実験内容の検討

高齢者世帯協同居住除雪支援実験

過疎地域へのホームビジット型除雪支援活動実験

地域主体の雪対策実態調査

(3) その他

・今後の進め方について

・次回作業部会の日程について

4. 閉会

(2) 第2回検討会議の討議内容

1) 「ホームステイ型除雪支援実験」について

) 対面式の実施方法について

事務局提案：モニターの方が、各受入家庭に到着後、受入家族と対面式をする。

検討後：各家庭で、対面式をするのではなく、受入家庭、モニターが一堂に会して対面式をする。受入家庭の方が対面式の場所へ向かう際の交通費を負担する。

) 降雪がない場合について

降雪がないことは想定しにくいだが、備えとして「砂撒き」を体験していただくなど、ある程度柔軟な実験計画を立案しておく。除雪体験自体は「ホームビジット型除雪支援活動実験」でもできる。

2) 「ホームビジット型除雪支援活動実験」について

) 企画するツアーの内容について

事務局提案：「観光を含む除雪ボランティアツアー」を提案。

検討後：観光スポットがそばにないような地域でも、除雪支援のニーズは高いと考えられることから、事務局提案の「観光を含む除雪ボランティアツアー」に加え、観光を含まない「除雪支援重視の除雪ボランティアツアー」も検討する。

3) 「地域主体の雪対策実態調査」について

) アンケート調査対象について

事務局提案：澄川地区を対象に、「除雪支援ボランティアを行っている」中学生、その家庭、福祉除雪事業を利用している家計、「除雪支援ボランティアを行っている」中学生が所属する中学校、の4者についてアンケート調査を実施することを想定。

検討後：除雪ボランティアを行うような地域づくりを念頭に、なぜ同地区の中学生は除雪支援ボランティアを行うのか、同地区でも除雪支援ボランティアを行わない中学生との差を生む要因はどこにあるのか、を明らかにするアンケート調査を行う必要がある。

) アンケート方法について

- 中学校に協力を依頼し、「除雪支援ボランティアを行っている中学生とその家庭」、および「除雪支援ボランティアを行っていない中学生とその家庭」の両者にアンケート調査を実施し、その差異を明らかにする。
- 除雪支援ボランティアに取り組むことになった歴史的経緯等、アンケート調査では把握しにくいことを、ヒアリング調査を行うことで補足していくことを検討。
- どのような形式の調査を行うにせよ、中学校との連携が不可欠である。

) 調査対象地区について

事務局提案：澄川地区を想定

検討後：清田区でも中学生による除雪支援ボランティアが行われており、ヒアリング調査を検討する。また、過去に中学生による除雪支援ボランティアが行われていたが、現在は行われていない地区があれば、その地区に対する調査を行う。

1 - 3 - 3 第3回検討会議の開催

(1) 第3回検討会議の概要

日 時 : 平成19年3月6日(水) 13:00~15:00

場 所 : 社団法人北海道開発技術センター 会議室

出席者 :

<座長>

原 文宏 北海道開発技術センター 理事

<委員>

須田 力 北海道大学 名誉教授

赤城 由紀 札幌国際大学 助教授

根子 俊彦 財団法人 札幌国際プラザ 札幌コンベンションビューロー 次長

三浦 春菜 首都大学東京大学院

<オブザーバー>

小松 正明 北海道開発局 開発監理部 開発調整課 開発企画官

廣瀬 貴久 北海道 知事政策部 参事 主任

安達 竹志 札幌市建設局 管理部 雪対策室 計画課 課長

<事務局>

諸橋 和行 財団法人日本システム開発研究所 第二研究ユニット次長

大川戸貴浩 社団法人北海道開発技術センター 企画部地域政策研究室 首席研究員

新谷 陽子 社団法人北海道開発技術センター 企画部地域政策研究室 研究員

松田 浩敬 社団法人北海道開発技術センター 企画部地域政策研究室 研究員

議事次第

1. 開会

2. 出席者紹介

3. 議事

(1) 第2回検討会議 議事要旨確認

(2) 北海道における実験・調査結果の報告と意見交換

高齢者世帯協同居住除雪支援実験

過疎地域へのホームビジット型除雪支援活動実験

地域主体の雪対策実態調査

(3) その他

4. 閉会

(2) 第3回検討会議の討議内容

1) 第2回検討会議 議事要旨確認

- ・議事要旨確認については、配布資料にて確認のうえ、不明点などあれば後ほど議論する。

2) 北海道における実験・調査結果の報告と意見交換

) 高齢者世帯協同居住除雪支援実験

- ・ホームステイ型の除雪支援に対するニーズがない中で実証実験を行ったため、受入窓口となった担当者は非常に苦労した。しかし、こういったことが、ホームステイ型の除雪支援を受け入れるきっかけにはなるのではないかと。
- ・受入家庭に対するアンケートのなかで、札幌市内でも除雪に困っている世帯があるので、そういったところでホームステイ型の除雪支援を行えばよいのではないかと、というコメントがあった。
- ・受入家庭ばかりでなく、その周辺等の除雪を行うのも良いのではないかと。その場合、ホームステイ型ではなく、ホームビジット型が適しているのではないかと。
- ・除雪ボランティアに参加した留学生の感想としては、4名中3名が「楽しかった」と回答し、1名のみ「もうやりたくない」と回答している。
- ・「やりたくない」と答えた方がホームステイした世帯は、障がいのある方の世帯であり、1人で除雪をしたために、あまり楽しくなかったのではないかと(除雪が「労働」となってしまった)。
- ・「楽しくない」と感じた留学生がホームステイした世帯は、除雪ボランティアを必要としている世帯である。当初、空いている部屋を利用してそこに居住し、除雪を行うことを想定していたが、実際には難しいことが察せられる。
- ・まずはじめに、ホームビジットがあり、交流があったあとで(自然発生的に)ホームステイとなる、という段階を経ていくのがよいと考えられる。
- ・外国人に、「なぜ、高齢者宅の除雪ボランティアが必要か」という共通認識を持ってもらうことが重要であり、こういった点について評価するべき。
- ・現時点と国に帰ってからで、ボランティアの意欲に変化があるかもしれない。こういったことが外国人留学生を参加させる意義ではないのか。
- ・「もう少し効率的に実施されれば、もっと役に立てたのに」や「札幌の生活が大変だ」という感想を持っている者もいて、非常に意識の高い参加者であったと考えられる。また、留学生の場合、帰国後も今回の経験が活かされるのではないかと。
- ・留学生への動機付けとして、異文化交流がメインなのか、除雪ボランティアがメインなのかによって参加する者のインセンティブが異なるのでは。
- ・このタイムスケジュールでは、異文化交流をするようなことは厳しいのではないかと。
- ・留学生が帰った後のホストファミリーの様子はどうだったか。受入が終わった後のホストファミリーは、非日常から日常に戻り、非常に疲れるはず。
- ・「もうやりたくない」と答えた留学生は、楽しみながら除雪をする、ということができなかったのではないかと。

) 過疎地域へのホームビジット型除雪支援活動実験

雪はね体験隊(上富良野)

- 例年より雪が少ないということだったが、作業はあり、少しは役に立てたのではないかと感じた。
- 今回は平屋の家が対象であったが、屋根の雪下ろしを考えると、落ちると大けがをするな、と感じた。
- 食事は、食材の説明をしていただけたのが非常によかった。交流部分が非常に大事。ただ作業をするだけでは辛い。
- 道具が壊れたことについては、除雪のルールを考慮するよりは、雪質に応じた道具の準備のほうが大事だと考えられる。今回は用意した道具は適切でなく、地元の方から借りることとなり、壊すにいった。
- 地元の方は、「今年度除雪ボランティアに来てくれたのだから、来年も来てくれるのではないかと」考えている可能性がある。こういったことに対するケアをどうするか。
- 地元との交流が大事だが、この場合、自分が実際に除雪をした場所の住民が「地元の方」であり、そういった方々との交流法を考えるべき。
- 作業後にお茶を飲むくらいでもいいから交流の場をセッティングできればよかったのでは。
- 2月から3月にかけては、春休みであることや3年生が就職活動に入るなど、募集が難しい。

雪かきボランティア(岩見沢市栗沢町万字)

- 今回は、募集期間が3日しかなかった。
- 万字は観光地が近くになく、そういったところで、こういった楽しみを見いだして除雪をするかが重要。普段、触れることがないような地域を学ぶことは大学等ではできない。
- 安全に屋根の雪下ろしできるような方法を研究し、学生でも安全に屋根の雪下ろしができるようにすることが必要。
- 豪雪時に足りない除雪の担い手をどうするか、というのが本調査の元々の主旨であった。参加する者の意識に合わせたメニューがあってよい。上富良野型の、どちらかといえば与えられた楽しみ中心のツアーもあれば、自分たちで楽しみを見出すような、むしろ参加者に学びの機会を与えるようなツアーがあってもよい。
- 学生にかぎらず「ありがとう」や「ごくろうさん」と言われることで、十分やってよかったと思う。そういったことがうまく引き出されればよい。
- ゼミ単位で募集するなどすれば意外と除雪ボランティアとして学生を集めることが可能ではないか。
- ボランティア組織のようなものを通じ、募集から派遣までをコーディネートしていく体制がよいのではないかと。
- 実際に困っている方の現状を周知しないと、消極的な参加となってしまう。
- 「困っている人を助けたい」や「楽しみを重視する」といった動機に応じたコーディネート体制を構築すれば、興味深い組織ができる可能性がある。

) 地域主体の雪対策実態調査

- 生産人口は働きに行くため、結果的に高齢者や主婦が地域協力員となってしまう。
- 制度上、正午くらいまでに除雪作業をすることになっているため、生産人口は地域協力員となりにくい。
- 時間的余裕がある者と、時間的余裕がない者とで、募集の仕方を変えるべきでは。需用者と供給者のマッチングがうまくいっていない。
- 清田区の北の大地小学校は、社会福祉協議会と学校が連携し、学校側は教育的意義に配慮している。
- どういった先生が勧めるかによって、生徒の受け取り方が異なる。進路指導の先生が勧めれば、受験に関係あるのか、と考えてしまう場合もある。
- 中学生ボランティアは、直接的に地域協力員を補うことはできないが、長い目で見た場合に地域の担い手になり得る。
- ホームビジット型の除雪ボランティアはきっかけづくりになり得る。そのきっかけを持続させるのに、自分が居住する地域でも除雪ボランティアを行うような仕組みが必要では。
- 難関の大学に行く学生が多い高校ほどボランティアをしない。学力とは何か。学校まかせにしないで地域で考える必要がある。
- 普段思っている以上に、学生は場が与えられれば一生懸命やる。除雪ボランティアは、すぐに始めることができるため、きっかけづくりとして最適ではないか。

1 - 4 調査及び実証実験の報告

北海道部会で実施する調査及び実証実験は、以下のとおりであり、全体フローを図表 1 - 10 に示す。

1 . ホームステイ型除雪支援実験

道外及び海外の来訪者（特に若者）が、日常的に除雪を必要としている高齢者宅に滞在し、滞在費（宿泊・食事等）を支払う代わりに滞在先でボランティア除雪を行う。

実施場所：札幌市

2 . ホームビジット型除雪支援実験

過疎地域で屋根の雪下ろし等の重労働を伴う除排雪を必要としている高齢者宅に、他地域（道内都市部、道外、海外等）から訪問し、ボランティア除雪を行う。

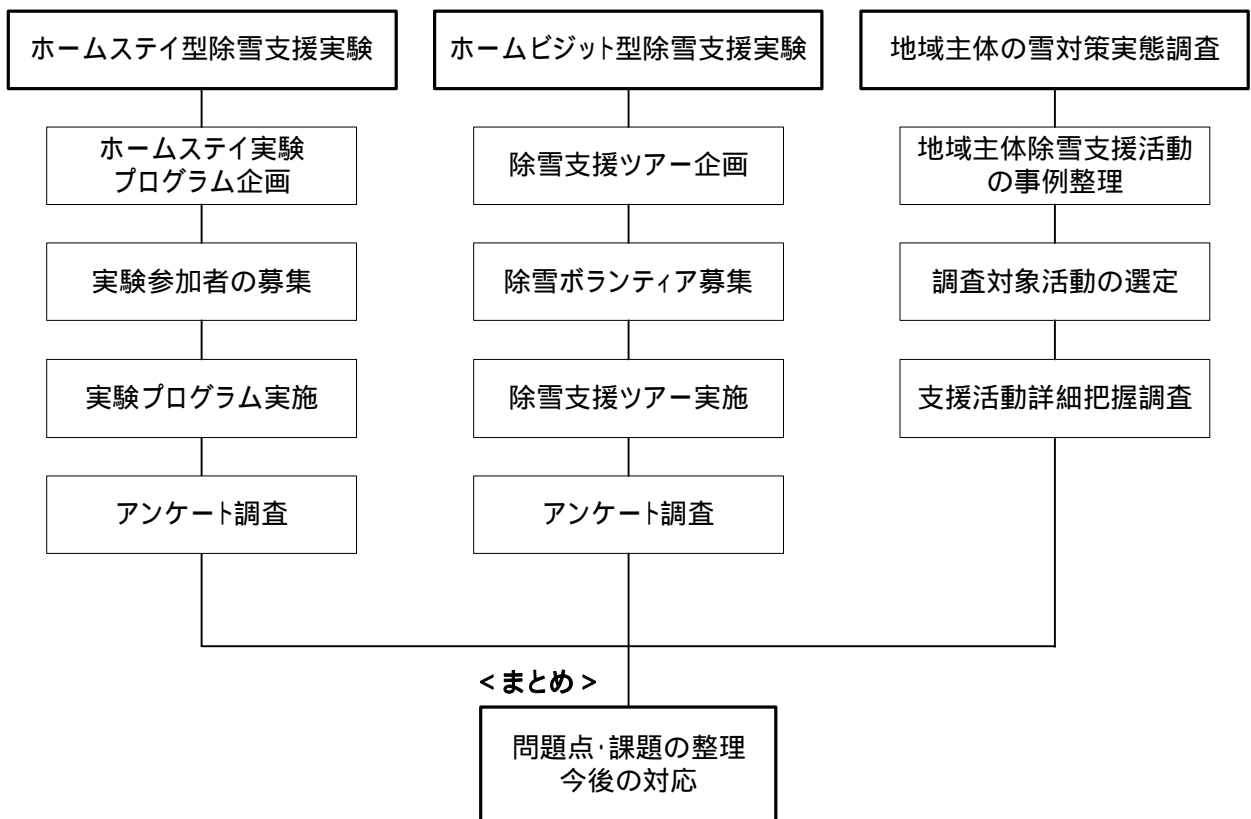
実施場所：上富良野町、岩見沢市栗沢町

3 . 地域主体の福祉除雪事例調査

地域が主体となって取り組んでいる福祉除雪の事例を整理し、現状と課題を把握する。

実施場所：札幌市南区澄川地区

図表 1 - 10 全体フロー



1 - 4 - 1 ホームステイ型除雪支援実験

(1) 実施目的

他地域から雪処理の担い手を確保し、平時より他地域との交流を基にした雪処理の相互扶助のあり方を検討することを目的に、観光や留学などで北海道を訪れた人が高齢者世帯でホームステイし、交流を深めながら除雪支援を行う実験を実施した。

実験で確かめたいこと

- 観光などで北海道を訪れた人（学生・外国人）がホームステイを行い、ホストファミリーと交流を深めるとともに、除雪支援を行うことが可能かどうかを検証。
- 特に、戸建てに住む高齢者世帯の空き部屋に学生又は留学生在がホームステイし、宿泊費を払う代わりにホームステイ先で除雪をすることが、除雪の担い手確保の手段として有効かどうかを検証。

(2) 実験概要

実施期間

平成 19 年 2 月 16 日（金）～2 月 19 日（月）（3 泊 4 日）

ホームステイ対象者（以下、ゲスト）

首都大学東京大学院に在学中の留学生 4 名（韓国出身：女性 2 名、中国出身：男性 2 名）

受入家庭（以下、ホストファミリー）

札幌国際プラザのホームステイ制度に登録している家庭 4 世帯

費用

- ゲストに対し、札幌までの交通費の一部（一人当たり¥33,000、源泉徴収分含む）と国内旅行保険（一人当たり¥540）を支給
- ホストファミリーに対し、ゲスト送迎経費の一部（一家庭当たり¥1,000）を支給

全体スケジュール

図表 1 - 11 のとおり

実験フロー

図表 1 - 12 のとおり

ゲスト、ホストファミリー

図表 1 - 13 のとおり

図表 1 - 11 ホームステイ型除雪支援実験 全体スケジュール

月日	内 容	備 考
2/16 (金) 午前	ゲストが札幌市内に到着	
13:30	ゲスト対象のオリエンテーション (於：札幌国際プラザ 3F会議室) ・ 実験内容の確認 (dec) ・ ホームステイ注意事項の説明 (国際プラザ)	* 時間が余った場合は自由時間とし、対面式前に再度集合する場合もある
14:15 頃	・ 除雪講習会 (須田先生)	
15:30 頃	・ 除雪実習 移動	
16:00 頃	実習終了 札幌国際プラザに戻る 対面式 (於：札幌国際プラザ 3F会議室) ・ ホストファミリーとゲストの紹介(国際プラザ) ・ 滞在時の注意/連絡事項の説明、確認 (") ・ アンケートの配布 (dec) ゲスト、各ホームステイ先へ	* ホストファミリーによっては 17 時半～18 時頃になる場合もある
2/17 (土) 8:30	ゲストが札幌駅に集合 除雪体験日帰りツアー「雪はね体験隊！」に参加 (於：上富良野町)	1 - 4 - 2 参照
21:30 頃	ゲストが札幌駅に到着、解散 ゲスト、各ホームステイ先へ	
2/18 (日) 終日	ホストファミリーとの交流	
2/19 (月) 午前	ホストファミリーとの交流	
13:30	解散式 (於：札幌国際プラザ) ・ アンケート回収 (dec) ゲスト、新千歳空港へ	* ホストファミリーによってはゲスト単独で参加

< 注意事項 >

- 一緒に話す時間をお互いに持つなど、ホストファミリーと相談の上、交流の時間を設ける。
- ホームステイ先での除雪は、ホストファミリーがお願いした時のみ実施し、ホストファミリーの指示にしたがって除雪する。(天候状況などから、除雪を全く必要としない場合もある。)
- ホストファミリー宅で除雪のお手伝いをした場合は、その時の写真撮影と簡単な記録(アンケート票の除雪ダイアリー)をする。
- ホストファミリー宅での除雪は、家の出入口や周辺の除雪や運搬排雪が中心となり、重大事故のリスクが高い屋根の雪下ろしは行わない。

図表 1 - 12 ホームステイ型除雪支援実験 実験フロー

	ホスト	ゲスト	事務局
準備 1月中 ～ 1月末	<p>ホストの応募</p> <p>ゲスト名の連絡</p>	<p>ゲスト応募</p> <p>ホストの連絡</p>	<p>国際プラザ:ホストの募集 dec:ゲストの募集</p> <p>国際プラザ:ホストとゲスト のマッチング、調整 ・ゲスト、ホストの決定</p>
実験 2月16日 ～ 2月19日	<p>ホームステイ開始(3泊4日) ・降雪時の除雪支援、記録 ・食事等による交流など * 2/17は日帰り除雪ツアー参加</p>	<p>・オリエンテーション ・除雪実習</p> <p>・対面式 ・紹介、注意事項確認、アンケート配布</p> <p>・解散式 ・アンケート回収</p>	<p>緊急時連絡</p>
フォロー アップ 2月20日 ～ 2月25日	<p>追加アンケート (もしあれば)</p>	<p>追加アンケート (もしあれば)</p>	<p>・アンケート集計 ・結果とりまとめ</p>

図表 1 - 13 ゲスト及びホストファミリーの基本情報

ゲスト	ホストファミリー
<p>Aさん 大韓民国女性 38才 首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 入学予定</p>	<p>W家 家族構成：夫妻 40代と 60代 住 所：札幌市白石区（マンション） 喫煙状況：非喫煙家庭、禁煙</p>
<p>Bさん 大韓民国女性 29才 主婦（夫が首都大学東京大学院博士課程 応用化学専攻）</p>	<p>X家 家族構成：夫妻 50代 住 所：札幌市清田区（戸建て） 喫煙状況：非喫煙家庭、禁煙</p>
<p>Cさん 中国男性 31才 首都大学東京大学院 土木工学専攻</p>	<p>Y家 家族構成：40代夫妻、娘高校生、息子中学生 住 所：札幌市北区（戸建て） 喫煙状況：喫煙家庭、喫煙可</p>
<p>Dさん 中国男性 24才 首都大学東京 社会学専攻</p>	<p>Z家 家族構成：夫妻 60～70代 住 所：札幌市豊平区（戸建て） 喫煙状況：非喫煙家庭、禁煙</p>

(3) オリエンテーションの実施

実験の開始にあたり、オリエンテーションとして、札幌国際プラザ会議室にてプログラムの概要や注意事項の説明を行うとともに、須田委員の指導の下、実際の高齢者宅で除雪実習を行い、雪かき時の良い姿勢と悪い姿勢の例などを実演した。

日時

平成 19 年 2 月 16 日 (金) 13:30 ~ 15:30

場所

札幌国際プラザ (オリエンテーション)

札幌市中央区の民家 (除雪実習)

出席者 (ゲスト・ホストファミリー以外)

北方圏体育スポーツ研究会 北海道大学名誉教授 (除雪指導)	須田 力
財団法人札幌国際プラザ 次長	根子 俊彦
財団法人札幌国際プラザ	宮澤 麻衣子
社団法人北海道開発技術センター	大川戸 貴宏
社団法人北海道開発技術センター	新谷 陽子

配布物

<ゲスト>

- ・道外及び外国人来訪者ホームステイ型除雪支援実験 実施要項
- ・除雪ガイドブック「人力除雪学序説」

須田委員他による除雪ガイドブック。除雪経験のない人だけでなく、除雪経験のある人にとっても、除雪作業の見直しや再考に役立つ参考書として配布した (ホームビジット型除雪支援ツアー参加者にも配布)。

- ・雪はね体験隊 隊員のしおり
- ・アンケート調査票 (ゲスト用)
- ・交通費
- ・長靴 (事務局より貸出) 防寒具は新千歳空港のレンタル会社で貸し出し (費用は事務局負担)
- ・使い捨てカメラ (除雪記録用)

<ホストファミリー>

- ・アンケート依頼文・調査票 (ホストファミリー用)

<オリエンテーション(説明)>

写真1-1 オリエンテーション風景1



写真1-2 オリエンテーション風景2



<除雪実習>

写真1-3 除雪の指導1



写真1-4 除雪の指導2



写真1-5 雪かきの良い姿勢の指導



写真1-6 雪かきの悪い姿勢の指導



(4) ホームステイ中の除雪作業

4名のゲストは、ホームステイ期間中、それぞれのホストの家屋周りの雪かきを実施しており、その様子は以下のとおりである。

図表 1 - 14 ホームステイ中の除雪作業の様子

<p>Aさん</p> <p>左：作業前 右：作業後</p>		
<p>Bさん</p> <p>ホストが車庫の屋根雪を下ろし、ゲストが運搬 左：作業前 右：作業中</p>		
<p>Cさん</p> <p>融雪槽に雪を投げ入れる</p>		
<p>Dさん</p> <p>車庫と家の周辺を除雪</p>		

(5) ホームステイ型除雪支援実験の評価 - アンケート結果 -

1) ゲストのアンケート結果

- ホームステイ先の除雪は全員が体験し、事故なく安全に作業ができた。
- ホームステイ全体のプログラムを通して、3名が「良かった」「また参加したい」と回答したが、1名が「どちらとも言えない」「参加したくない」の回答であった。
- 次回の参加意向がない1名は、他3名と違って、ホームステイ先の除雪を単独で行っていた。このように、除雪作業を単独で行う場合と、ホストファミリーと一緒にいる場合では、ホストとゲストの交流の内容や質が異なると考えられる。
- プログラムの今後の課題として、ゲストの一人は、除雪作業が必要となる天候やタイミングに合わせて計画する、滞在先から離れた場所(上富良野町)でのボランティア除雪は移動時間が長く非効率的であるため、滞在先近隣でのボランティア除雪が望ましい、等を指摘していた。

図表 1 - 15 ホームステイ型除雪支援実験 アンケート調査結果(ゲスト)

項 目		結 果
参加理由	参加したいと思った理由	・「北海道に行きたかった」と「除雪を体験したかった」がゲストに共通した理由
ホームステイ先の除雪体験	実施日	・2/18のみが2名、2/18-19の両日をした人が2名
	作業時間	・全員が午前中のみ作業 ・最長が1時間半
	作業内容	・玄関及び家周辺の除雪と運搬排雪作業が中心 ・ホストの屋根の雪下ろしの手伝いや融雪槽への投雪を体験したゲストもいた ・ホスト宅だけでなく、両隣の高齢者宅の歩道除雪を実施したゲストもいた
	作業体制	・一人を除く全員がホストと一緒に作業
	作業の疲労度	・「ちょうど良かった」が3名、「思ったより楽だった」が1名。
	作業の安全度	・全員が「安心して作業できた」
	作業中に困ったこと	・全員が「なかった」
	作業の事前準備	・全員が「役立った」
プログラム全体の満足度	今回のホームステイの感想	・3名が「よかった」 ・残り1名は「どちらとも言えない」
	今後の参加意向	・3名が「はい(今後も参加したい)」 ・残り1名は「いいえ(参加したくない)」
感想	<p>・このような良い機会をつくってくださり本当にありがとうございます。良い経験をたくさんして楽しかったです。</p> <p>・雪が少なく今回はちょっと残念。この数日間に雪が降っていないため、役に立つことは出来なかった。天候やタイミングの選定することも今後の活動設計の留意点になるのではないかと思う。</p> <p>・スケジュールの作成もより効率的なものをつくることを深く考えるべきであると思う。ホストファミリーはもちろん、ホストファミリー以外の所で活動する場合には、滞在地の近いところ(移動時間がたくさんかからないところ)を選べると、時間的に効率的であり、体力にも楽(負担にならない)になり、もっと良く役に立つことができると思う。</p>	

2) ホストファミリーのアンケート結果

- ホストファミリーの募集段階では、除雪を必要とする家庭を見つけるのが困難であったが、最終的には、全てのホストファミリーが日常的に除雪する家庭であった。
- 今冬は例年よりも少雪であり、ゲスト滞在期間中もまとまった降雪が見られなかったが、それぞれのホスト先ではゲストに除雪する機会を備えたように思われる。中には、近隣の高齢者宅前の歩道除雪を一緒にしたケースもあった。
- ゲストの除雪体験についても、ホスト全員が肯定的であり、ゲストの働きぶりに感心していた。障害を持つホストと60歳代、70歳代のホストについては、ゲストが除雪することで「助かった」とコメントしている。
- ゲストに除雪を依頼することはホスト全員が「良い」と考えており、そのうち、「交流」や「異文化理解」の一助になることを示唆するコメントもあった。
- あるホストは、除雪に慣れていないはずのゲストが意外にも上手にスコップ等を使って除雪しているのを見て安心したとコメントしたが、これは事前の除雪実習や上富良野での除雪体験が活かされているものと考えられる。
- ゲストの感想にもあったが、ホストの感想にも、ホームステイ先から遠方へのボランティア除雪は時間や体力的にも無理があるため、ホームステイ近辺での活動が望ましいとのコメントがあった。今後のプログラムを検討する上で十分配慮すべき点である。

図表 1 - 16 ホームステイ型除雪支援実験 アンケート調査結果 (ホストファミリー)

項 目		結 果
属性	性別・年齢	・40代～70代まで
	ホストファミリー歴	・1家庭は初めて、残りは4年～30年のホストファミリー歴あり
	家族構成	・3家庭は夫婦、1家庭は子供2人の4人家族
	居住年数	・1年～30年と幅広い
	居住形態	・3家庭は「戸建て」、1家庭が「アパート/マンション」
除雪習慣	居住場所での除雪 ・ご自分で(または家族)定期的に家や周辺を除雪しますか	・全家庭で「する」 ・玄関/出入口の他、車庫/駐車場、屋根もあった
ゲストの除雪体験	体験の有無、実施日、時間	・全家庭で「はい」 ・体験実施日はゲストとの記録のズレがあったが、作業内容は同じ
	作業内容	・「玄関/出入口等を除雪」「雪を運び出す(運搬排雪)」が中心 ・その他、車庫の屋根の雪下ろしの排雪、近所の高齢者宅前の歩道除雪などもあった
	印象	・ゲストの一生懸命な働きぶりに感心した様子
	手伝ってもらって	・「助かった」「良かった」「安心した」など
全体	北海道の暮らしを理解する上で、ゲストが除雪を体験することについてどう思いますか	良いと思う 「異文化理解」、「交流」などに良い
感想	<ul style="list-style-type: none"> ・今回は札幌の家庭にホームステイしながら、メインの除雪体験の場は上富良野町でした。このような形では時間的にも大変だったろうと思います。やはり除雪体験をする市町村にホームステイして、その地域の住民と交流できるようにするのが良いのではないのでしょうか？ ・札幌にも除雪ボランティアを必要としている高齢者の住宅はたくさんあります。これから色々検討すべき課題もあるかと思いますが、有意義な実験だと思しますので、若い人達ということでなく、体を動かせる人達が楽しんで参加できるように考えていただきたいと思います。 ・時期的には1月下旬頃が最も人手を必要としている時期ではないでしょうか？ ・今年は雪が大変少なく本来の北海道とはちょっと違った感じだったのが残念です。 	

3) ホストファミリー役員

補完的な調査として、札幌市のホストファミリー制度の役員 10 名に、ゲストに対する除雪体験についてのアンケートを行った。

- 日常的に除雪をすると回答したのは 7 家庭だったが、これまでにゲストに除雪のお手伝いを依頼したのは 1 家庭のみであった。
- 日常的に除雪するが、今までゲストにお願いしなかったのは、「たまたま機会がなかった」が大半であり、「申し訳ない」、「冬にゲストを受け入れたことがない」などの理由もあった。
- ゲストが除雪を体験した家庭では、除雪機を使ったときに「楽しんでいた」という印象をもった。
- ゲストに除雪を依頼することに関し、ほとんどが「良い」と考えており、「交流」や「異文化理解」の一助になると考えるホストもいる。

図表 1 - 17 ホストファミリー役員：ゲストへの除雪依頼に関するコメント

ゲストに除雪を依頼することに関するコメント	性別	年齢	ホストファミリー暦
・南の国の人なら珍しいかもしれない。	女性	50 歳代	3 年
・したかったらよい経験になる。	女性	50 歳代	12 年
・アジアからのゲストが多く、雪を見た事がないと思うので、良い経験になる。(ゲストは)お客様ではないので。	女性	40 歳代	3 年
・ステイ先のファミリーのお手伝いは基本的にした方が良いと思うので、その一環として。	女性	40 歳代	10 年
・雪に親しむ事と雪国の生活の大変さを理解する。	男性	50 歳代	8 年
・楽しい経験のひとつとなると思われます。	女性	50 歳代	6 年

(6) 当初予定の変更点と検討課題

北海道部会の三浦委員と根子委員の協力の下、ホームステイ型除雪支援実験におけるゲストとホストファミリーを募集したが、いくつかの問題が発生し、当初予定していた募集条件を変更せざるを得なくなった。その問題点と今後の検討課題を以下に整理する。

1) ゲストの募集について

ゲストの募集に関する問題点及び変更内容は、図表 1 - 18 のとおりである。日本人学生は、ホームステイ体験を「気を遣う」、「わずらわしい」と考える傾向が強い。また、留学生にとってホームステイは異文化体験の絶好の機会となるため、日本人学生よりも希望者が多いと考えられる。したがって、ホームステイ型は主に留学生を想定したプログラムとして検討し準備を進めることが現実的と推察される。

図表 1 - 18 ゲスト募集の問題点と変更内容

問題点	結果 (当初予定より変更)
<ul style="list-style-type: none"> ・首都圏の学生に呼びかけたが、「ホームステイは気を遣う」、「友人と一緒に泊まりたい」などの理由で断るケースが多かった。 <p>(首都大学東京)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生 (外国人) のみの参加となった。

2) 現状のホームステイ制度を利用したホストファミリーの募集について

現状のホームステイ制度 (札幌市国際プラザ) を利用したホストファミリーの募集に関する問題点及び変更内容は、図表 1 - 19 のとおりである。

「支援が必要な高齢者」が他人の面倒を見る余裕がないと考えられることから、自助努力による除雪が困難な高齢者がホストファミリーとなることは考えにくい。したがって、ホストファミリーとして登録する高齢者世帯は健康であり、あえて除雪支援を受ける必要のない家庭 (裕福な家庭) であると考えられる。「除雪」が「交流」と結びついていると認識しない限り、ホストファミリーが「除雪支援を受ける」目的でゲストを受け入れることは期待できないであろう。

今後の課題としては、高齢者世帯にこだわらず、除雪を必要としているホストファミリーに対して参加募集を呼びかけていく必要がある。さらに、ホームステイによる「除雪」がホストとゲストの「交流」をより深めるきっかけになるかどうかをまず検証し、こうした「交流」を広げることで、地域全体の除雪の担い手が確保されるかどうかを検討する必要がある。

図表 1 - 19 ホストファミリー募集の問題点と変更内容

問題点	結果（当初予定より変更）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 60歳代で戸建てに住む高齢者世帯 20 件に協力を要請したが、 ロードヒーティングなどの消融雪施設がある。 民間の除雪事業者と既に契約している。 などの理由で全て断られた。 ・ 実験の中心である「ホストファミリー先でゲストが除雪すること」が、本来のプログラムの目的である「異文化交流」と関連が希薄であるため、受け入れに消極的となる家族が多かった。 <p style="text-align: right;">（札幌国際プラザ）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 戸建てに住む高齢者世帯、または、除雪を必要とする世帯にかかわらず、従来の「異文化交流」を目的としたプログラムとして、ホストファミリーを募集する。 ・ ホストファミリー宅での除雪についてはホスト側の希望を優先する。可能であれば、除雪体験を実施できるサポートやフォローをお願いする。 ・ ゲストにはホームビジット型除雪実験に参加していただき、ボランティア除雪を体験していただく。

< 参考意見 >

岩見沢市栗沢町民生委員児童委員協議会 会長 木村良三氏

- ・ 独居高齢者宅に町外の若者（学生など）が滞在しボランティア除雪をすることは、以下の理由で困難と考えられる。
 - 見知らぬ他人を自宅に入れることに対し抵抗感がある。
 - 見知らぬ他人に食事を提供する等の「お世話」をおっくうと感じる。
 - 高齢者を狙った詐欺が横行している中、民生委員としては「知らない人間を家の中に入れたい」等、見知らぬ人に対して警戒するようにアドバイスしている。
- ・ ただし、除雪できる若い人が非常に少ないため、除雪ボランティアは積極的に受け入れていきたい。

(7) ホームステイ型除雪支援の推進に向けた課題と方向性

実験状況及びアンケート調査結果から、ホームステイ型除雪支援を推進するにあたっての課題と方向性を整理すると、以下のとおりである。

) 現状のホームステイ制度を活用した「除雪支援」と「交流」

- ホストファミリーとして既に登録をしている世帯は、概ね健康であり、経済的にもゆとりがあって、あえて除雪支援を受ける必要のない家庭が多かった。
- 本来は「異文化交流」を目的としているホストファミリーにとって、「ホスト宅での除雪支援」が本来目的とあわない(と、認識しがちである)ため、実験の主旨を理解していただくことが困難であった。
- 実際に、ホストファミリー役員対象のアンケートによると、これまでゲストに除雪のお手伝いをお願いしたケースはほとんどなかった。
- しかし、本実験に参加したホストファミリーは、アンケート調査で、ゲストの除雪体験は意義あることであり「異文化理解」のきっかけにつながるとの考えを示した。また、ゲストの除雪がホストファミリーの直接的な手助けになったことも明らかになった。
- このように、ゲストによる「除雪支援」がホストファミリーの潜在的なニーズであることが示唆される。(特に、高齢のホストファミリーに対する除雪支援のニーズは高い。)

- 今後は、ゲストによるホスト先での「除雪支援」が、「交流」を深めるきっかけとして定着するように継続的な取組が望まれる。

) 日本人学生及びホストファミリー未経験世帯の「ホームステイ観」

- 日本人学生は、ホームステイを「気を遣う」「わずらわしい」ととらえる傾向が強い。
- ホストファミリーを経験したことのない高齢者も同様に「気を遣う」等、見知らぬ他人を自宅に入れることに対し抵抗感を示す。
- 最近、特に高齢者を狙った詐欺が横行し、いわゆる「除雪詐欺」も発生していることから、見知らぬ人には警戒するようにとの指導を民生委員が行っている。

- 最初から「ホームステイ」を前提としたプログラムではなく、「ホームビジット」による除雪支援プログラムを導入し、除雪支援側と被支援側のコミュニケーションが深まった段階で、「ホームステイ」に移行できる仕組みが求められる。

) ホームステイ先での除雪体制

- 本実験では、1名のゲストにおいて、プログラムに対する満足度が比較的 low、次回の参加意向を示さなかった。
- この1名は、ホームステイ先での除雪を単独で行っており、ホストファミリーと一緒に作業していなかった。
- 除雪作業を単独で行う場合は、ホストファミリーと一緒にする場合よりも「労働」や「作業」の色合いが強く、ホストファミリーとの「交流」が希薄であったことが考えられる。

- 除雪作業をホームステイ先での「労働」ではなく、ホストファミリーとの「交流」のきっかけになることを前提条件として実施すべきである。

) 除雪経験のないゲスト（来訪者）に対する除雪実習

- 今回はオリエンテーションの中で除雪実習を行い、除雪未経験であったゲストに除雪の基本的な動作や注意事項を伝えることとした。
- 結果、除雪時の事故もなく安全に作業を終了できた。また、ホスト側としても、ゲストの除雪作業ぶりを見て安心するなどのコメントもあった。

- 除雪経験のない人が除雪ボランティアに参加するにあたっては、除雪実習を事前に行うことは安全確保において重要であり、今後も実施すべきである。

1 - 4 - 2 ホームビジット型除雪支援実験

(1) 実施目的

他地域から雪処理の担い手を確保し、平時より他地域との交流を基にした雪処理の相互扶助のあり方を検討することを目的に、札幌在住の若者及び道外から観光に訪れた若者等によるホームビジット型の除雪支援ツアー実験を実施した。

なお、除雪支援ツアーの実施に際しては、図表 1 - 20 のとおり、「体験・交流型」と「支援型」の 2 パターンを企画した。

実験で確かめたいこと

- 札幌在住者または道外観光客によるホームビジット型の除雪支援ツアーが、中山間地域の高齢者世帯への除雪支援として有効な策となり得るかを検証。

図表 1 - 20 除雪支援ツアー 名称・内容・場所

パターン	名称	内容	場所
体験・交流型	雪はね体験隊!	ボランティア除雪だけでなく、地域交流、イベントを組み合わせた日帰りツアー	上富良野町
支援型	雪かきボランティア	ボランティア除雪のみの日帰りツアー	岩見沢市栗沢町 万字地区

(2) 雪はね体験隊(上富良野町)の実施報告

1) 雪はね体験隊 実施概要

北海道上富良野町あすなる団地において、以下のとおり、札幌市内の大学生等を中心としたホームビジット型除雪支援ツアーを実施した。

実施日時

平成 19 年 2 月 17 日(土) 8:30 ~ 21:30

場所

北海道上富良野町泉町 1 丁目 あすなる団地 (13 世帯対象)

参加人数

29 名(事務局除く) うち 1 名は美瑛から現地参加

募集方法

- 検討部会の委員を通じて、募集ポスター掲出およびチラシを配布
- シーニックパイウェイ支援センターのホームページに掲載

参加費

2,000 円（食費、入浴料込み）

内容

- ・ 玄関先、庭周辺・窓の下の除排雪、屋根雪の運搬排雪
- ・ 除雪支援先との交流（食事付き）
- ・ 温泉入浴
- ・ 地元で開催される冬のアートイベント「ウインターサーカス 2007」鑑賞

当時配布物

- ・ 除雪ガイドブック「人力除雪学序説」
- ・ 当日のスケジュール
- ・ 除雪の 10 ヶ条（「雪はね体験隊！」しおりは事前に送付）
- ・ アンケート調査票
- ・ 軍手
- ・ シーニックバイウェイ情報誌「SCENE」

現地受入協力

- ・ 上富良野町役場（企画財政課企画振興班）
- ・ 上富良野町商工会

ツアー企画協力（申込・問合せ先）

有限責任中間法人シーニックバイウェイ支援センター

当日の除雪指導

北海道医療大学 看護福祉学部 人間基礎科学講座 教授 森田 勲

留意点

- 除雪作業範囲・レベルについて
 - ・ 基本的には協力世帯で必要とされている作業をツアー参加者が実施する。
 - ・ 屋根の雪下ろし作業は事故リスクが高く、ツアー参加者のレクリエーション保険の適用が困難であるため、雪下ろし作業は地元側で対応し、ツアー参加者は、玄関前の間口除雪や世帯周辺の除排雪作業を行う。
- 除雪用具について
 - ・ 除雪用具（スコップ、スノーダンプ）は上富良野町役場に準備していただく。
 - ・ 防寒具や長靴などはツアー参加者が各自準備する。
- 保険について
 - ・ ツアー参加者全員にレクリエーション保険をかける。

当日の流れ

8:30	JR 札幌駅北口集合
8:45	JR 札幌駅出発 (集まり次第出発) <バスで移動 シーニックバイウェイ大雪・富良野ルート、車中で食事>
11:30	上富良野町 (除雪現場) 到着、体験準備
12:00	除雪体験開始
14:30	除雪体験終了、白銀荘へ出発
15:00	白銀荘 到着 ・食事 & 交流会：地元の食材を使った手作り料理を地域の人と一緒に
16:00	・温泉入浴
17:15	・ウインターサーカス・白銀荘会場 鑑賞
17:45	白銀荘 発 車中でアンケート配布 <ウインターサーカス・深山峠・見晴台・寒々村会場鑑賞>
21:30	JR 札幌駅到着・解散 アンケート回収

図表 1 - 21 募集チラシ (左：表、右：裏)

ちびっと大雪、でも心も体も暖まる雪国のお手伝い。

雪はね体験隊!

in 上富良野

2007年2月17日(土) 8:30~21:30

【開催日時】
2007年2月17日(土) 8:30~21:30

【開催場所】
上富良野町 除雪現場

【参加費】
2,000円 (食事、入浴料込み)
※参加費は別途お支払いください。

【募集要項】
募集期間：平成19年2月9日(金) 18時～2月16日(土) 18時
対象年齢：20歳以上
募集人数：30名程度
※お申し込みは、募集要項をご覧ください。

【お申し込み・お問い合わせ先】
 scenicbyway.jp
 札幌駅前通スクエアビル4F 札幌センター (TEL: 011-204-7108)
 札幌駅前通スクエアビル4F 札幌センター (TEL: 011-204-7108)
 札幌駅前通スクエアビル4F 札幌センター (TEL: 011-204-7108)
 e-mail: info-sc@scenicbyway.jp

ちびっと大雪、でも心も体も暖まる雪国のお手伝い。

雪はね体験隊!

2007年2月17日(土) 8:30~21:30

【スケジュール】
8:30 JR札幌駅北口集合
9:00 JR札幌駅出発 (乗車中食事) ※乗車中食事 (乗車中食事) ※乗車中食事
11:30 上富良野町 (除雪現場) 到着、体験準備
12:00 除雪体験開始
14:30 除雪体験終了、白銀荘へ出発
15:00 白銀荘 到着
16:00 温泉入浴
17:15 ウインターサーカス・白銀荘会場 鑑賞
17:45 白銀荘 発 車中でアンケート配布
21:30 JR札幌駅到着・解散

【お申し込み・お問い合わせ先】
 scenicbyway.jp
 札幌駅前通スクエアビル4F 札幌センター (TEL: 011-204-7108)
 札幌駅前通スクエアビル4F 札幌センター (TEL: 011-204-7108)
 札幌駅前通スクエアビル4F 札幌センター (TEL: 011-204-7108)
 e-mail: info-sc@scenicbyway.jp

2) 雪はね体験隊 当日のタイムテーブル

8:30 JR 札幌駅北口集合

8:45 出発

- ・貸切バスに参加者、TV 北海道取材陣(3名)、dec スタッフ2名、ガイド1名が乗車。(この他 dec スタッフ2名は先発隊としてレンタカーにて7:30頃出発)
- ・しおり(抜粋)、軍手、須田先生・森田先生著『人力除雪学序説』、シーニックバイウエイ情報誌「SCENE」、お茶・お弁当を配布。車内にて、事業説明、旅程確認。
- ・道の駅「三笠」と見晴台公園(上富良野)でトイレ休憩。

10:30 先発隊が上富良野町役場に集合、現地確認

- ・自家用車で来られた森田先生(除雪指導:北海道医療大学)、美瑛からの参加者が合流。
- ・上富良野町役場の受入窓口担当の佐藤主査が除雪用具(スコップ、スノーダンプなど)を軽トラックに積んで現地へ誘導。
- ・あすなる団地住民会(泉町住民会)会長の米澤義英氏が除雪場所、作業内容を先発隊に説明、作業人数の確認。

12:30 国道12号の渋滞で、当初の予定より1時間遅れでバスがあすなる団地に到着

- ・佐藤主査が見晴台公園でバスと合流、バスを現地まで誘導。
- ・森田先生より除雪時の注意事項など参加者に説明。

12:45 除雪作業開始

- ・スタッフの指示で参加者を4班に分け、それぞれの班に住民会役員がついてグループに指示を出す。
- ・屋根の雪下ろしは上富良野町役場の担当者及び地元の方が実施。その他の除排雪作業を参加者が行う。
- ・各班の持ち場が終了した時点で、他の班の作業を応援。

14:15 除雪作業終了、撤収

14:30 あすなる団地から白銀荘へ出発

- ・住民会の米澤会長他2名の方と上富良野町役場の野崎主幹が食事&交流会出席のためバスに同乗。

15:00 白銀荘到着

- ・地元食材の豚肉、米、ジャガイモなどを使った食事と交流会。
- ・温泉入浴。

17:30 ウィンターサーカス白銀荘会場のライトアップ

- ・同会場のライトアップが17:30~に変更となったため、出発を18時に変更。

18:00 白銀荘から深山峠、見晴台公園へ出発

- ・深山峠会場でバスをUターンさせて見晴台公園へ。

18:50 ウィンターサーカス見晴台公園を見学、トイレ休憩

19:10 札幌に向かって出発(三笠から高速道路を利用)

- ・バス車内でアンケート配布、回収。
- ・各参加者から感想を発表。

21:30 JR 札幌駅北口到着、解散

3) 雪はね体験隊 活動状況

雪はね体験隊の活動の様子は、以下のとおりである。

写真 1 - 7 森田先生による除雪指導



写真 1 - 8 作業前のグループ分け

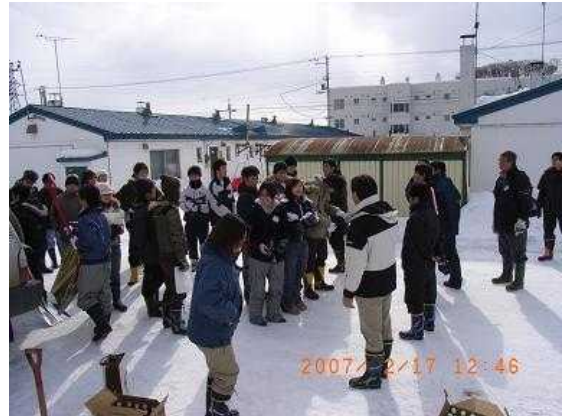


写真 1 - 9 窓の下の除雪 (開始直後)



写真 1 - 10 窓の下の除雪 (開始 15 分後)



写真 1 - 11 屋根の雪下ろし (地域住民)



写真 1 - 12 下ろした屋根雪の運搬排雪



【特記事項】

- 平年より雪が少なかったが、融けて凍った雪山や氷の固まりが住宅周辺に積み上げられていたため、非常に重い雪（氷）の処理や運搬排雪が作業の大半を占めていた。
- 作業中の天候は良好であったため、防寒具を脱いで作業することになった。半袖・Tシャツ姿で作業する参加者も多く、作業中と作業後の体温調整に十分配慮した服装準備が必要と考えられる。
- 固まった雪や氷が多かったため、スコップ1本、つるはし1本、スノーダンプ1台が破損した。そのうち、つるはしとスノーダンプは地元住民が所有していたものであり、本来であれば主催者側が弁償すべきであったが（注：通常であればレクリエーション保険が適用）住民会長のご懇意により住民会で新規購入をすることになった。このような作業中の破損に関する事後処理の方法については今後の課題である。
- 帰りのバス車両の中での意見によると、参加者の満足度はかなり高く、参加者自身も期待以上のものであったことがうかがえる。
- しかし、移動時間が長い中で様々なプログラムを消化せざるを得ない過密スケジュールであったため、地元との交流の時間が十分でなかった等の問題がアンケートで指摘されていた。
- 移動中や除雪作業前後のトイレ休憩のタイミングは、当初のスケジュールではあまり考慮されていなかったため、場合によっては、除雪現場でのトイレ確保に奔走しなければならないケースも想定される。作業時のトイレ休憩のタイミングは十分配慮が必要である。

(3) 雪かきボランティア(岩見沢市栗沢町)の実施報告

1) 雪かきボランティア 実施概要

北海道岩見沢市栗沢町万字地区にて、以下のとおり、札幌市在住の大学生によるホームビジット型除雪支援ツアーを実施した。同地区は、岩見沢市街地から約20km山間に入った旧産炭地であり、高齢化率が60%を超える特別豪雪地帯である。

日 時 : 平成19年2月14日(水)
 場 所 : 北海道岩見沢市栗沢町万字地区の独居老人宅2軒
 募集方法 : 北海道大学内に募集チラシを掲示
 参加者及び参加人数 :
 北海道大学名誉教授 須田 力 氏
 北海道医療大学教授 森田 勲 氏
 除雪支援ツアー応募者 10名
 事務局 2名

図表1-22 岩見沢市栗沢町万字におけるホームビジット型除雪支援の募集チラシ

急募 雪かきボランティア

場所: 岩見沢市万字(岩見沢から20km山に入った旧産炭地で高齢化率60%以上、特別豪雪地帯指定地です)
 日時: 平成19年2月14日(水)午前8時~午後3時30分



北大生たちと体育教員による旧産炭地、独居老人宅の除雪ボランティア、平成18年2月、岩見沢市美流渡地区にて

スケジュール(予定)
2月14日(水)8時北大正門前集合、
8時10分出発
10時 万字交通センター到着
10時10分~12時30分 除雪
12時30分~13時 美流渡に移動
13時~13時30分 昼食(ラーメン屋さん)
13時30分 美流渡出発
15時30分 北大正門前到着 解散

交通費無料、ラーメン代は主催者が負担します。
 雪かき未経験者でも十分役にたてます。
 防寒服、帽子着用、手袋、長靴で来て下さい。
 重い雪のため多量の発汗も予想されます。手ぬぐい、替えの下着もご用意下さい。
 往復は、(社)北海道開発技術センターの車に分乗します。

申込み、連絡先
 2月9日(金)17時まで下記まで、お名前、所属、住所、電話番号をお知らせ願います。
 007-0840 札幌市東区北40条東9丁目1-13
 北方圏体育スポーツ研究会
 須田 力 (元北海道大学大学院教育学研究科教授)
 電話/ファックス: 011-752-7217 メール: sudariki@poppy.ocn.ne.jp

2) 雪かきボランティア 当日のタイムテーブル

8:00	北海道大学正門前集合
	・須田力名誉教授から、万字地区の概要説明（高齢化の状況、除雪場所の説明）。
8:10	出発
	・学生8名がレンタカー2台に分乗。
	・自家用車で参加している方1名。
	・計3台で万字交通センターへ向け出発。
10:30	万字交通センター到着、除雪作業開始
	・自家用車で来られた森田教授と合流。
	・須田名誉教授の指示で2グループに分かれ、それぞれの除雪場所へ移動。
	・除雪場所 - 須田名誉教授、万字地区町内会長、事務局員1名、一般男性1名、学生3名（全員男性）が担当。
	・除雪場所 - 森田教授、事務局員1名、学生5名（男性3、女性2）が担当。
11:30	除雪場所 の除雪終了
	除雪場所 の応援に移動
13:00	除雪場所 の除雪終了
	・北海道岩見沢市栗沢町美流渡に移動。
13:30	北海道岩見沢市栗沢町美流渡にあるラーメン屋にて昼食
	・アンケート用紙配布・記入・回収。
14:30	札幌へ向け出発
15:50	北海道大学近辺にて解散

3) 雪かきボランティア 活動状況

参加者は出発に先立ち、須田力北大名誉教授から、岩見沢市栗沢町万字地区における高齢化の状況、今日に至るまでの歴史的経緯、除雪支援対象の独居老人宅についての説明を受けた。

今回の除雪対象世帯は2軒であり、2グループに分けて作業を行った。除雪場所は、須田名誉教授、事務局員1名、一般男性1名、学生3名（全員男性）が担当となり、これに地元の協力者として万字地区の町内会長が参加した。作業内容としては、須田名誉教授、万字地区町内会長、一般男性、事務局員が屋根の雪下ろしを担当し、学生3名は、家屋周り及び屋根の除雪を担当した。

除雪場所は、森田教授、事務局員1名、学生5名（男性3、女性2）が担当となり、家屋周りの除雪を行った。

なお、作業の最中に近隣住民から、雪捨て場についてのクレームが寄せられた。

写真 1 - 13 出発前の説明 1



写真 1 - 14 出発前の説明 2



写真 1 - 15 除雪場所 作業前



写真 1 - 16 除雪場所 作業後



写真 1 - 17 除雪場所 作業前



写真 1 - 18 除雪場所 作業後



(4) ホームビジット型除雪支援実験の評価 - アンケート結果 -

1) 雪はね体験隊 参加者アンケート結果

雪はね体験隊では、プログラム終了時に、参加者に対してアンケート調査を実施した(回答者数 29 名)。調査項目は図表 1 - 23 のとおりであり、以降に調査結果を整理する。

図表 1 - 23 参加者アンケート調査項目 1/2

調査項目		選択肢	検証事項
属性	性別	男 女	基本属性
	年齢	10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代以上	
	出身地/国籍	札幌市 札幌市内の道内 道外 海外	
	現住所	札幌市 札幌市内の道内 道外 海外	
除雪/ボランティア経験	居住場所での除雪経験 ・自分で家の周辺を除雪したことがありますか?	したことがある 1.玄関/出入口 2.車庫/駐車場 3.屋根 4.その他 まったくない 1.雪が降らない 2.ロードヒーティングがある 3.他の人がする 4.その他	除雪経験またはボランティア経験の有無と、参加意欲の関係
	除雪熟練度 ・除雪は慣れていますか?	慣れている あまり慣れていない 全く慣れていない	
	ボランティア活動経験 ・ボランティア活動をしていますか?	活動している したことはあるが、今はしていない 今までしたことがない	
	除雪ボランティア経験 ・これまで除雪ボランティアをしたことがありますか?	したことがある 1.近所の玄関先等の除排雪 2.近所の屋根の雪下ろし 3.遠方での除雪・屋根の雪下ろし 4.その他 したことがない	
参加理由	(HS)	北海道に行きたかった ボランティア活動をしたかった 除雪を体験したかった ホームステイを体験したかった 友人・知人に誘われた その他	* 参考調査
	(HV: 上富良野)	上富良野に行きたかった ボランティア活動をしたかった 除雪(雪はね)を体験したかった 地元の食材を使った料理を食べたかった 地元の人と交流したかった 温泉に行きたかった ウィンターサーカス2007を見たかった 友人・知人に誘われた その他	
除雪体験(HS)	実施日と作業時間	日時、時から 時まで	作業の実態把握
	作業体制 ・誰と一緒に除雪しましたか?	ホストファミリーと 一人で 両方のケースがあった	
除雪体験(共通)	主な作業内容	玄関/出入口等を除雪 雪を運び出す その他	
	作業の疲労度	ちょうど良かった 思ったより楽だった 思ったより疲れた	
	作業の安全度 ・安心して作業できましたか?	安心して作業できた 危険を感じたことがある (どのようなの?)	
	作業中に困ったこと	あった(どのようなの?) なかった	
	作業の事前準備 ・事前準備として除雪に関する冊子配布や注意事項の行いましたが、役に立ったでしょうか?	役立った 役に立たなかった どちらともいえない 気づいたこと	

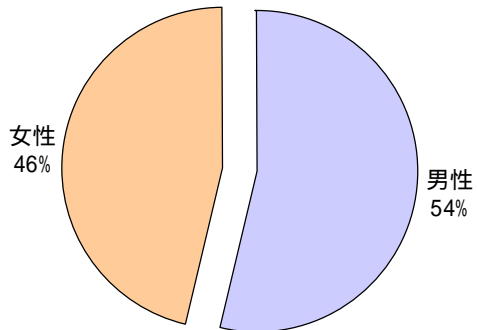
図表 1 - 23 ホームビジット型除雪支援 アンケート調査項目 2/2

調査項目		選択肢	検証事項
アフター除雪の満足度 (HV: 上富良野)	食事	よかった よくなかった どちらともいえない 印象に残ったこと	* 参考調査
	地元の人との交流	よかった よくなかった どちらともいえない 印象に残ったこと	
	温泉	よかった よくなかった どちらともいえない 印象に残ったこと	
	ウインターサーカス2007	よかった よくなかった どちらともいえない 印象に残ったこと	
企画(HV: 上富良野)	プログラム/活動の量	問題なし することが多くて忙しかった することがなく退屈だった	盛りだくさんのプログラム はよかったか?
	参加費 ・今回の参加費は¥2,000でしたが、実際の経費より低い額となっております。あとどのくらい追加しても良いと思いますか?	プラス¥1,000 プラス¥2,000 プラス¥3,000 プラス¥4,000 プラス¥5,000 プラス¥5,000より多く 追加したくない	参加費の設定
企画(HV)	宿泊プログラムについて ・今回は日帰りでしたが、現地で宿泊するプログラムになった場合、参加したいと思いますか? (参加費も増額となります)	参加したい どのようなプログラムを希望しますか? 1. 除雪体験のみ 2. 除雪体験 + 地元との交流 3. 除雪体験 + 地元との交流 + 観光/イベント参加 4. その他 参加したくない	宿泊プログラムの可能性
プログラム全体の満足度	(共通)	よかった よくなかった どちらともいえない 印象に残ったこと	属性、除雪/ボランティア 経験とのクロス
全体(HV共通)	今後の意向 ・今後、同じような体験ツアーがあったら、参加したいと思いますか?	はい どのような地域で? 1. 人口の高齢化が進み、除雪する人がいない地域 (例えば) 2. 自然環境の破壊が進んでおり、保全が必要な地域 (例えば) 3. 文化や歴史遺産の破損・倒壊が危ぶまれる地域 (例えば) 4. 地震、洪水、豪雪、火山噴火等の災害に見舞われた地域 (例えば) 5. その他 いいえ	

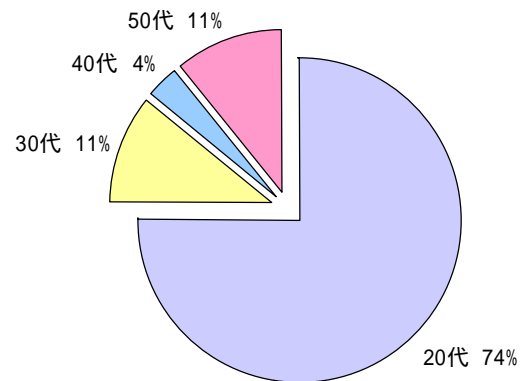
HS : ホームステイ型 HV : ホームビジット型

) 参加者の属性 (N=29)

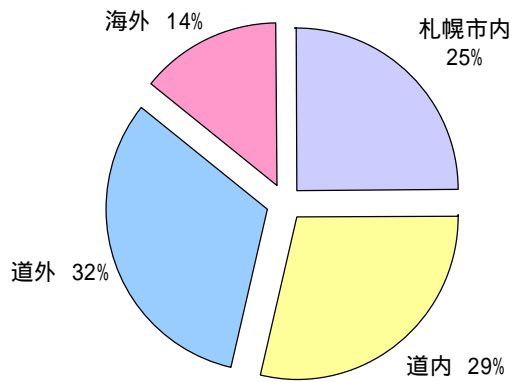
図表 1 - 24 性別



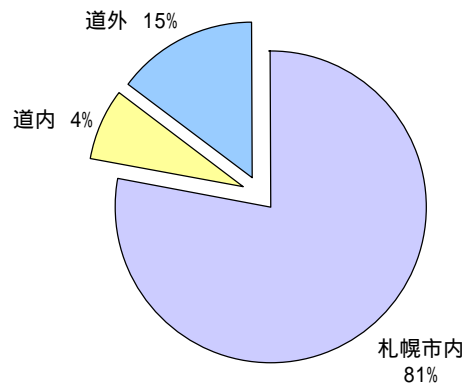
図表 1 - 25 年齢層



図表 1 - 26 出身地

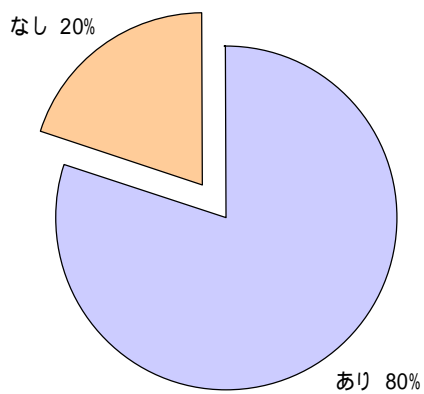


図表 1 - 27 現住所

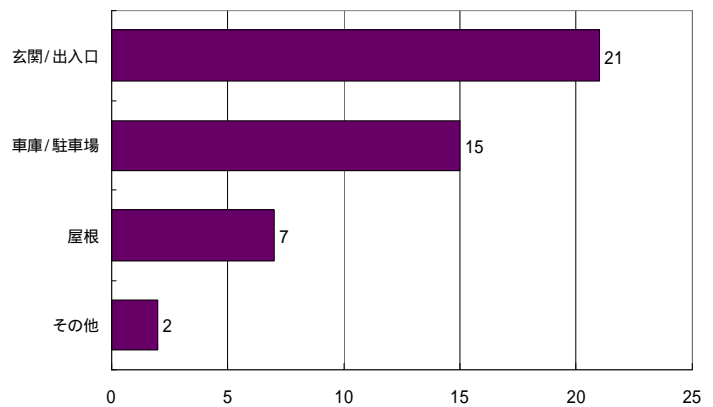


) 除雪作業・ボランティアの経験

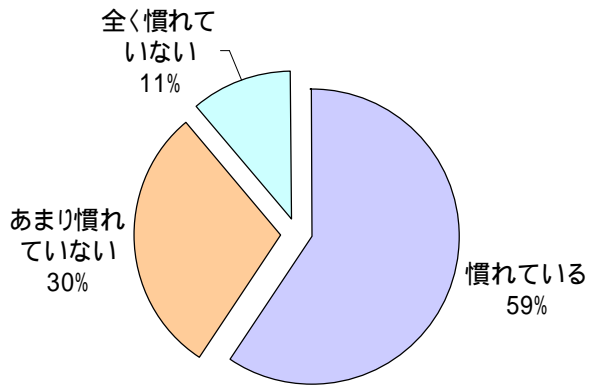
図表 1 - 28 除雪体験の有無



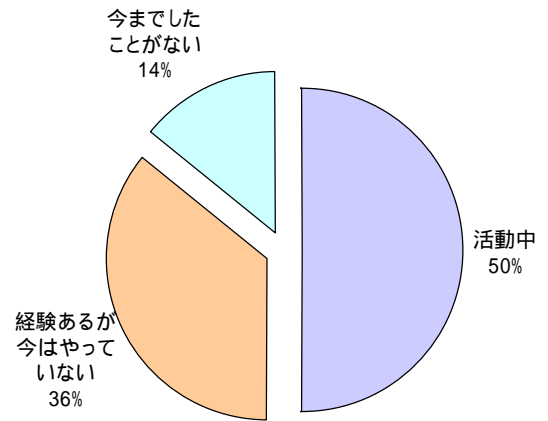
図表 1 - 29 除雪体験場所 (複数回答)



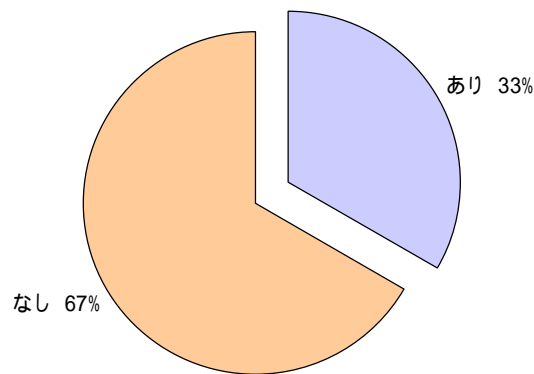
図表 1 - 30 除雪への慣れ



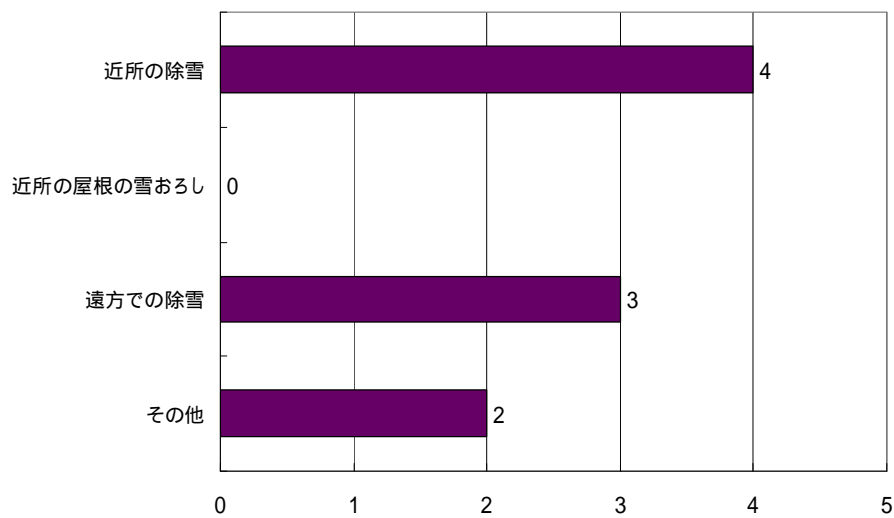
図表 1 - 31 ボランティア活動の経験



図表 1 - 32 除雪ボランティアの経験



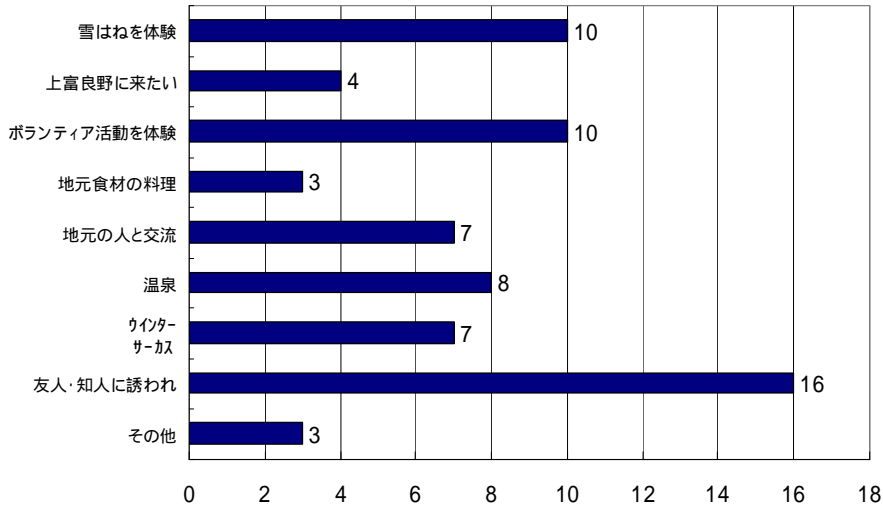
図表 1 - 33 除雪ボランティア経験者が除雪した場所 (複数回答)



参加理由

- 「友人・知人に誘われたから」が最も多いが、次いで、「ボランティア活動を体験したい」、「雪はね（雪かき）を体験したい」が多く、参加者のボランティア意識は比較的高い。

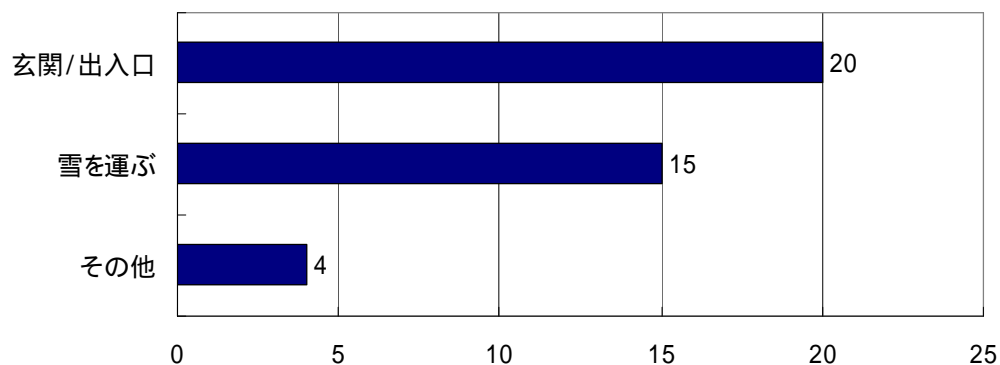
図表 1 - 34 参加理由（複数回答）



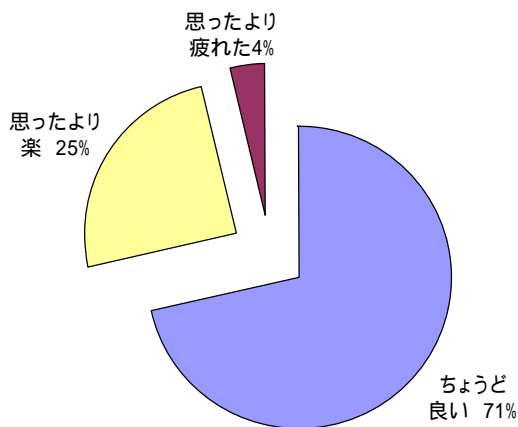
雪はね体験の内容について

- 実際に体験した作業は玄関や出入口の雪かきが多く、次いで除雪した雪を運ぶ作業であった。
- 作業の疲労度については、「ちょうど良い」が全体の約7割を占めている。「思ったよりも楽だった」を含めると、ほとんどの参加者は無理なく除雪作業ができたと感じている。
- 作業の安全性については、約9割が「安心してできた」と感じている。「危険を感じた」状況として、「スコップを振り回して危なかった」、「雪に埋もれた」が挙げられていた。
- 作業中に困ったことがあったかどうかについては、約8割が「なかった」と回答している。困ったことについては、作業中に用具（スコップやつるはし等）を破損したことや、用具が足りなかった等が挙げられていた。
- 除雪前に配布した冊子や事前説明については、約7割が「役立った」と回答している。

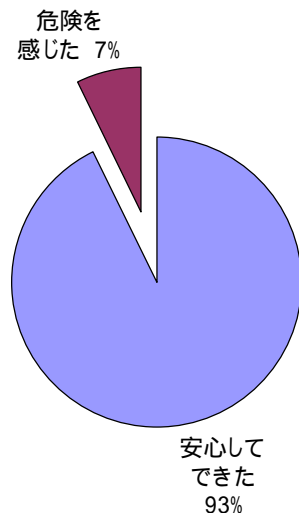
図表 1 - 35 雪はね体験：作業内容（複数回答）



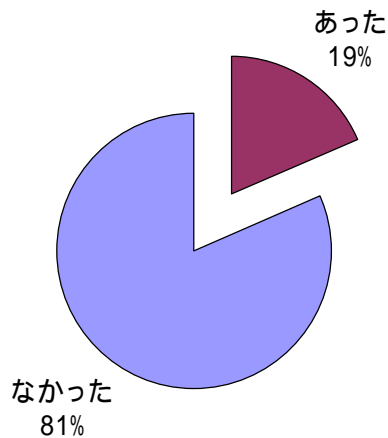
図表 1 - 36 雪はね体験：疲労度



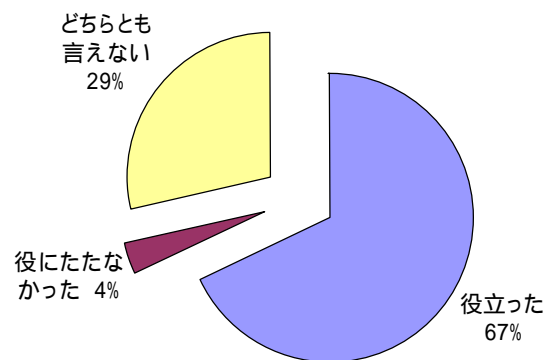
図表 1 - 37 雪はね体験：作業の安全性



図表 1 - 38 雪はね体験：困ったこと



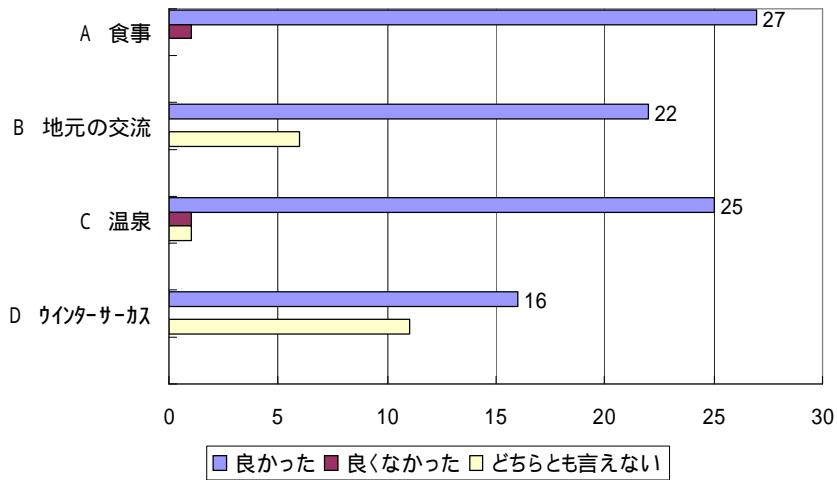
図表 1 - 39 雪はね体験：冊子・事前説明



) 除雪後のアクティビティについて

- 除雪後のアクティビティについては、参加者の半数以上が「食事」、「地元の交流」、「温泉」について「良かった」と回答していた。
- 「ウインターサーカス」については、当日のスケジュール調整で、見学を予定していた2つの会場をキャンセルしたほか、それぞれの会場で十分な時間を費やすことが出来なかったため、「どちらともいえない」と回答した人が多くあったと考えられる。
- 参加者が不満に感じたこととして、「食事と温泉の順序を逆にするともっと良かった」、「ご飯の時間帯が微妙でした。昼ご飯が食べづらかった」、「もう少し時間があれば」など、アクティビティの内容ではなく、プログラムの順番や時間割りに関することが挙げられていた。
- 印象に残ったこととして、「現地のおばあちゃんの笑顔」など、地元の人との交流に関するコメントが、他のアクティビティと同じ程度に寄せられていた。

図表 1 - 40 除雪後のアクティビティに対する満足度



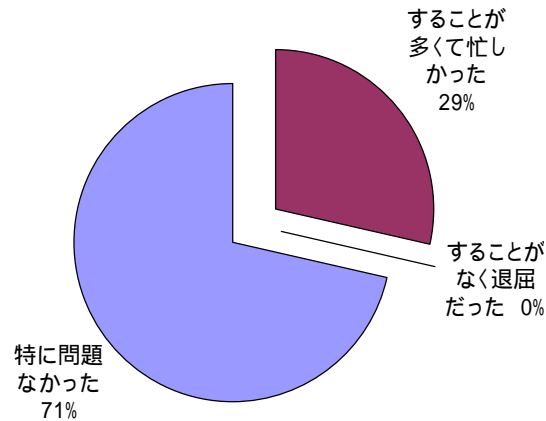
図表 1 - 41 除雪後のアクティビティ：印象に残ったこと

アクティビティ	印象に残ったこと（自由記入）
食事	寒い中での汁粉が美味しかったです
	チャーシュー・ニョキがおいしかったです
	おかわりがたくさんあった
	豚肉美味しかったです
	地元の美味しい食事でした
	お弁当ボリューム有り、でも食事と温泉の順序を逆にするともっと良かった
	イモが美味しかったです
	美味しかったです
	食べやすかったです
	豚肉美味しかったです
地元との交流	美しい景色と共に地元の人達と楽しく出来ました
	ばあちゃんの笑顔
	地元のおばあちゃんと写真をとって色々話せた
	特に交流が無かった
	みんなとても暖かかったです
	おばあちゃんかわいい
	みんないい人でした
	会長さん面白い
	皆明るく元気だった
	地元の人との交流がもっとできたような気がします（高齢者他）
現地のおばあちゃんの笑顔	
温泉	面白かった人達が多かった
	露天風呂が気持ちよかったです
	露天風呂の熱
	すごく気持ちよかったです
	いっぱい温泉入って気持ちよかったです
	美瑛岳をみて感激した
	混浴が珍しくあったこと
	いいお湯だった
疲れが十分にとれた	
ウィンターサーカス	雪で色々な事が出来るんだと改めて感じました
	もっと見たかったです
	あんまり良く見れなかった
	キレイでした
	もう少し時間があれば
	キレイ、お汁粉おいしかったです
	最後に見た場所は素晴らしかった
	北海道らしい雪の芸術がスバラシイ
	これほど良いイベントであったとは
	雪を有意義に使用していてキレイでよかったです

) 当日のスケジュールについて

- 全体の約7割が「特に問題がなかった」と回答している。
- 「することがなく退屈だった」と回答した人はなく、「することが多くて忙しかった」と感じた人が数名いた。

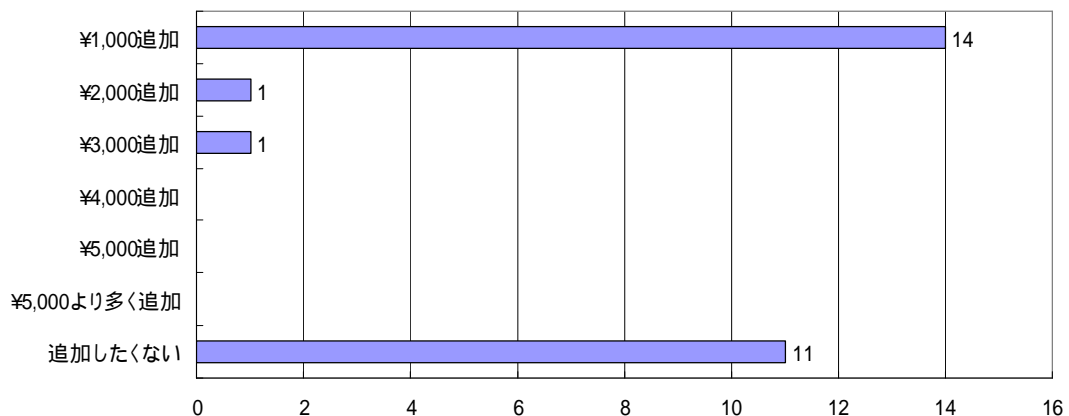
図表 1 - 42 当日スケジュールの感想



) 参加費用について

- 今回の参加費は2,000円であったが、1,000円追加して支払っても良いと回答した人が最も多く、2,000～3,000円を追加しても良いと答えた人も含めると、半数以上が今回の参加費より高く支払っても良いと感じている。
- 一方、「追加したくない」の回答も全体の約4割を占めている。

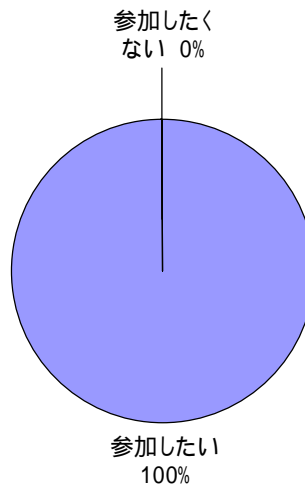
図表 1 - 43 参加費の支払い意思



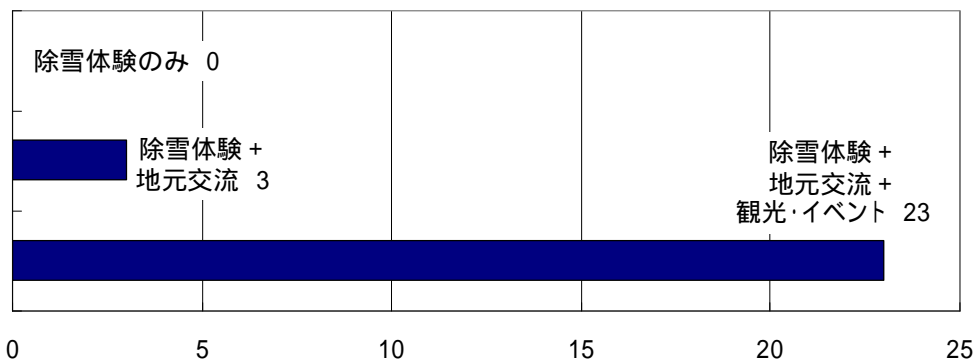
) 宿泊を伴った場合の参加意向について

- 参加者全員が、費用負担が増えたとしても宿泊を伴った除雪体験プログラムに参加したいとの意向を示している。
- 宿泊を伴った場合に希望するプログラムについては、「除雪体験のみ」はなく、地元との交流や観光・イベントと組み合わせたプログラムを希望している。

図表 1 - 44 宿泊を伴った場合の参加意向



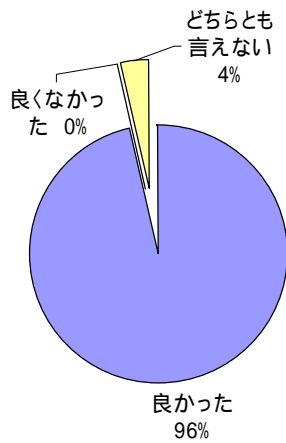
図表 1 - 45 宿泊を伴った場合に希望するプログラム



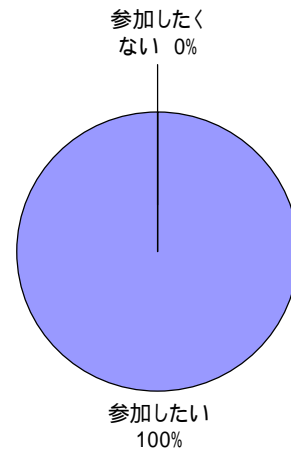
) プログラム全体の満足度と今後の参加意向について

- 全体を通しての満足度については、ほぼ全員が、「良かった」と回答している。
- 全体を通して印象に残ったこととして「地元の方に喜んでもらった」、「お年寄りの役に立てて良かった」等のボランティア除雪と地元の交流に関するコメントが多かった。
- 同じ体験ツアーが再び企画された場合も、全員が「参加したい」との意向を示している。
- 同じ体験ツアーが企画された場合、「人口の高齢化が進み、除雪する人がいない地域」と「自然環境の破壊が進んでおり、保全が必要な地域」が最も多く、高齢者対策や自然環境保全に高い関心が寄せられている。

図表 1 - 46 全体を通しての満足度



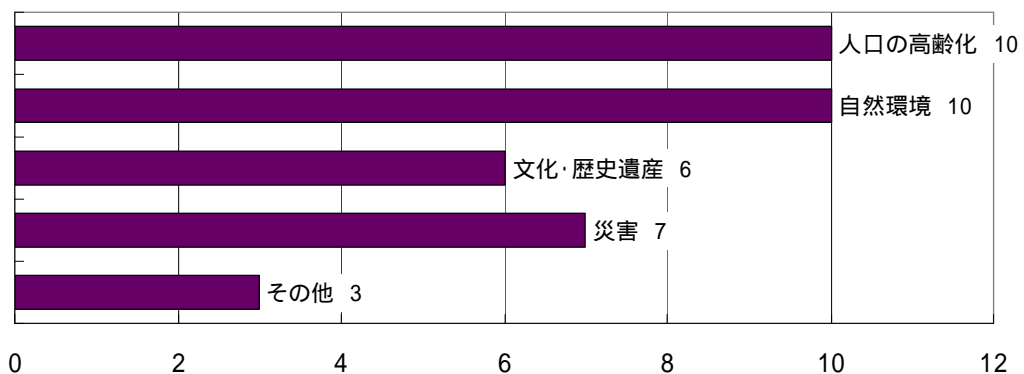
図表 1 - 47 同じ体験ツアーへの参加意向



図表 1 - 48 全体を通して印象に残ったこと

・地元の方に喜んでもらえた
・初めて雪はねがおもしろくなった
・地元の方に喜んでもらえた
・温泉、混浴は最高
・良かったけど、ご飯の時間帯が微妙でした。昼ご飯が食べづらかったです
・ウインターサーカスが素晴らしい
・思ったよりも時間があつという間でした、やはりおばあちゃんの笑顔が素敵でした
・お年寄りの役に立てて良かった
・いい流れだった

図表 1 - 49 同じ体験ツアーが企画された場合に希望する地域



- 人口の高齢化 : 人口の高齢化が進み、除雪する人がいない地域
- 自然環境 : 自然環境の破壊が進んでおり、保全が必要な地域
- 文化・歴史遺産 : 文化や歴史遺産の破損・倒壊が危ぶまれる地域
- 災害 : 地震、洪水、豪雪、火山噴火等の災害に見舞われた地域

2) 雪かきボランティア 参加者アンケート結果

岩見沢市栗沢町万字地区でのホームビジット型除雪支援実験（雪かきボランティア）は、「雪はね体験隊」とは異なり、観光的な要素を含まず、よりボランティア色を強めたものとしている。プログラム終了時に、参加者に対してアンケート調査を実施し（回答者数9名）、その結果を以下に整理する。なお、調査項目は図表1-23（42～43頁）に示したとおりである。

参加者の属性

参加者の属性を整理すると、図表1-50のとおりである。今回の実験では、北海道大学にチラシを掲示して募集したことから、男性1名を除き、参加者は北海道大学の学生であった。出身は道外であるものの、札幌に居住していることから除雪経験のある者が多く、「除雪を経験してみたい」という理由から参加した者はそれほど多くなかったと考えられる。実際、除雪経験のある者6名のうち女性2名を除き、「除雪作業に慣れている」と答えている。また、ボランティア経験をみると、9名中7名が何らかのボランティア活動を経験している。

図表1-50 雪かきボランティア 参加者の属性

調査項目		男性	女性	総数
年齢	10代	0	1	1
	20代	6	1	7
	50代	1	0	1
出身地	道内	1	1	2
	道外	6	1	7
除雪経験	経験なし	3	0	3
	経験あり	4	2	6
除雪への慣れ (除雪経験者のみ)	慣れている	3	0	3
	あまり慣れていない	1	2	3
ボランティア 活動の経験	活動している	2	1	3
	以前していた	3	1	4
	したことがない	2	0	2
除雪ボランティア の経験	近所の除雪	0	0	0
	近所の屋根の雪下ろし	2	0	2
	遠方での除雪	1	1	2
回答者総数		7	2	9

) 除雪作業の疲労度について

- 「思ったより疲れた」と答えた者はいなかった。また、「思ったより楽だった」と答えた3名は、「除雪経験がない」と答えた3名であった。
- 女性の参加や年齢等を勘案すると、あまり疲労度が高くない程度の作業量が望ましく、本実験の作業量は概ね適切であったといえる。

図表 1 - 51 作業の疲労度

性別	疲労度			総計
	ちょうどよい	思ったより楽だった	思ったより疲れた	
男性	4	3	0	7
女性	2	0	0	2
総計	6	3	0	9

) 除雪作業中の危険について

- 4名が作業中に「危険を感じたことがある」と答えており、4名とも屋根からの落雪についてであった。
- 屋根からの落雪の危険があったのは除雪場所 であり、ここでは屋根の雪下ろし作業と家屋周辺の除雪作業が同時になされていたことから、家屋周辺の除雪を担当していた者が落雪の危険を感じたと考えられる。
- したがって、屋根の雪下ろし作業と家屋周辺の除雪作業を組み合わせるような場合、作業の順番やボランティア参加者の配置等を考慮する必要がある。

図表 1 - 52 除雪作業中の危険

性別	安心して作業ができたか		総計
	安心して作業できた	危険を感じた	
男性	3	4	7
女性	2	0	2
総計	5	4	9

) 今後の企画内容について

- 本実験は「日帰り」であったが、「宿泊して除雪ボランティアをするならば参加したいか」という質問に対し、参加者全員が「参加したい」と回答している。
- 具体的にどのようなツアーであれば参加したいかを尋ねた結果、「雪かきのみ」の回答はなく、「地元との交流」もしくは「観光・イベント」との組み合わせで参加したいという回答が多くみられた。また、「その他」の内容は「雪かき+温泉」である。
- 以上より、除雪支援ツアーについては、宿泊の形態であっても参加の意向が高いものの、除雪のみでの参加意向はなく、何らかのイベントを組み合わせる必要があると指摘できる。

図表 1 - 53 参加したい除雪ボランティアツアーの内容

性別	雪かきのみ	雪かき + 地元交流	雪かき + 地元交流 + 観光・イベント	その他	総計
男性	0	2	4	1	7
女性	0	2	0	0	2
総計	0	4	4	1	9

- 「除雪支援に限らず、本ツアーのようなボランティアツアーがあった場合に参加したいか」という質問に対し、参加者全員が「参加したい」と回答している。
- 希望地域としては、「自然環境の破壊が進んでおり、保全が必要な地域」が3名いるが、「人口の高齢化が進み、除雪する人がいない地域」や「地震、洪水、豪雪、噴火等の災害に見舞われた地域」といった、その居住する人に直接影響を与えるような災害に見舞われている地域への参加意向がやや高くなっている。

図表 1 - 54 参加したいボランティアツアーの内容

性別	人口の 高齢化	自然環境	文化・ 歴史遺産	災害	総計
男性	7	3	0	2	12
女性	2	0	0	2	4
総計	9	3	0	4	16

- 人口の高齢化 : 人口の高齢化が進み、除雪する人がいない地域
 自然環境 : 自然環境の破壊が進んでおり、保全が必要な地域
 文化・歴史遺産 : 文化や歴史遺産の破損・倒壊が危ぶまれる地域
 災害 : 地震、洪水、豪雪、火山噴火等の災害に見舞われた地域

(5) ホームビジット型除雪支援推進の課題と今後の方向性

実証実験の結果をみると、参加者の満足度は非常に高く、その大きな要因として、地元の受入側もボランティアとともに作業をするなど、お互いに時間を共有する中で交流が深まったこと、一人で除雪をするのではなく、まとまった人数で作業し連帯感が生まれたことが挙げられる。除雪ボランティアだけでなく、地元の受入側も含めた「参加者」の交流の密度が、プログラムの満足度を高めているものと考えられる。

実験状況及びアンケート調査結果から、ホームビジット型除雪支援（「雪はね体験隊」及び「雪かきボランティア」）を推進するにあたっての課題と方向性を整理すると、以下のとおりである。

1) 雪はね体験隊について

) 除雪作業時のルールと事前準備の徹底

- 除雪作業用のスコップ及びスノーダンプは主催者側で準備したものを参加者に提供したが、作業中は参加者が地元住民の用具も使用し、破損してしまった。

- 今後は地元住民の用具は使用せず、主催者側の用具を必ず使用することを予め徹底する必要がある。
- 同様に、地元住民側にも作業中の用具の貸し出しはしないようお願いすることも必要である。
- 除雪現場の雪質や作業内容に適した用具を主催者側が準備する必要がある。

) 柔軟性のあるプログラムの作成

- 平年より少雪であったため、十分な除雪作業ができるかどうか不明であった。天候によっては作業場所や内容についても実施直前で見直しを余儀なくされる。
- 今回のプログラムは、移動時間が長く、アクティビティも盛りだくさんであったため、参加者の約3割が「することが多く忙しい」という印象をもった。
- 作業中でのトイレ休憩などは当初のスケジュールではあまり考慮されていなかったため、場合によっては、除雪現場でのトイレ確保に奔走しなければならないケースも想定される。

- 当初の予定通りに除雪ができない天候になっても、ツアーそのものをキャンセルするのではなく、代替プログラムを準備する等の工夫が必要である。
- 時間配分にゆとりをもたせ、状況に応じてプログラム変更をスムーズに行う工夫が求められる。

) 宿泊滞在するホームビジット型除雪支援の検討と課題

- アンケート結果から、「宿泊を伴ったツアーでも参加したい」という意向が圧倒的に多く、その場合でも、除雪ボランティアだけでなく、地元の交流や観光・イベントと合わせたプログラムを望む声が大きかった。
- 「雪かきボランティア」の参加についても同様の傾向がみられた。
- 日帰りよりも時間的にも余裕のある宿泊滞在型を実現するためには、除雪支援先での宿泊施設が必要となる。過疎地域に行くほど宿泊先の確保や受入側の体制づくり（宿泊場所や食事等）が課題となる。
- 除雪ボランティア以外のアクティビティについても、過疎地域になるほど、その選択肢が狭くなる可能性がある。

- 過疎地域で多少不便な生活であっても、無理なく楽しめるプログラムを検討する。
- 受入先が準備のために過度の負担を強いられないような工夫が必要である。

) 予算確保

- アンケート結果から、今回の参加費（2,000円）に1,000円追加しても良いと回答した参加者は全体の約半数を占めたが、約4割は「追加したくない」であった。
- 今回の参加費は、入浴料と食費（お弁当を除く）のみであり、その他の経費を補う金額ではなかった。

- 経費を補える予算確保（スポンサーなど）が今後の課題である。

) 継続性のある担い手づくりの仕組み

- 「ホームビジット型除雪支援」は、短期的に成果を上げることが期待できる取組である。しかし一過性のボランティア活動で終わってしまい、必要とする地域にとっては継続性のある「担い手」に結びつかないという懸念もある。
- 「ホームビジット型除雪支援」に参加しても、普段の生活に戻ったときに、その体験を直接活かせる場がなければ、体験そのものが風化する可能性が高い。したがって、参加者を継続性のある「雪処理の担い手」として育成していくため、例えば札幌市福祉除雪事業といった、身近な地域での除雪ボランティア活動が受け皿となって、活動の場を提供するなどの連携的な仕組みづくりが望まれる。

- 各地域での除雪ボランティア活動と連携した仕組みづくりが望まれる。

2) 雪かきボランティアについて

) 参加者の確保

- 本実験の参加者は、除雪経験があり、かつボランティア経験がある者が多く、除雪体験をするというよりもボランティアをするという目的で参加していると考えられる。
- 募集方法にもよるが、概して、ボランティア活動に対する意識が高い者ほどホームビジット型除雪支援ツアーに参加する可能性が高い。
- 今後、参加者を募集するに際して、本実験のようなボランティア意識の高い層をターゲットとするのか、あるいはボランティア意識は高いものの、実際に行動にまで至らない層や、ボランティアに参加する可能性があるにもかかわらず、知識がなくボランティア意識が高まっていない層等をターゲットとするのかを明確にする必要がある。

- 参加者の意識に合わせた効果的・効率的な募集体制が望まれる。

) 除雪作業の内容・手順の確立

- 作業「量」については、本実験は適度であったと考えられる。「思ったよりも楽だった」という回答もあったが、性別や年齢等を考慮し、なるべく多くの参加者を募るならば、本ツアー程度の作業量が適切であると考えられる。
- 作業「内容」については、屋根からの雪下ろしと家屋周辺の除雪を同時に行った場合、家屋周辺の除雪作業をしている者が危険を感じるため、時間差を設けて作業を行うなどの措置が必要である。
- 雪捨て場を間違えると近隣住民から苦情が出る場合があり、留意が必要である。

- 作業手順等を確立するとともに、近隣住民の理解を得るような体制づくりが必要である。
- 具体的には、支援ツアーの対象エリア居住者との綿密な連携を確立することが肝要である。

1 - 4 - 3 地域主体の雪対策実態調査

地域主体の雪対策実態調査として、札幌市の福祉除雪事業及び札幌市澄川地区における中学生除雪ボランティアの取組等について調査及び情報整理を行った。

(1) 札幌市福祉除雪事業の事例調査

1) 札幌市福祉除雪事業導入の背景

札幌市では、平成 12 年から、除雪が困難である高齢者や障がい者の世帯を対象に、住宅の間口や敷地内の除雪支援を行う「福祉除雪事業」を開始した。

事業の背景には、平成 2 年度の社会福祉協議会による「独居老人世帯等除雪サービス事業」の実施（平成 7 年度に「除雪ボランティア事業」に名称変更）があった。

平成 2 年度：社会福祉協議会による「独居老人世帯等除雪サービス事業」

- ・ 高齢者や障がい者の世帯を対象に、町内会の役員、民生委員・児童委員、ボランティアグループなどが間口部分の除雪を行う。
- ・ 利用者負担はなく除雪奉仕者には実費弁償として 1 世帯の除雪につき 5,000 円を支給。
- ・ 地域ごとの要支援者数やボランティア活動者数などによって、取り組み状況に格差が生じ、進行する少子高齢化を踏まえて、行政としても全市的・体系的な除雪支援の仕組みを構築することが求められた。

参考：山本公崇「福祉除雪事業と地域福祉 ～除雪支援による地域の支え合いの推進～」

その後、平成 12 年度に「札幌市の福祉除雪を考える市民委員会」が設置され、9 月に提言がまとめられた。ここで福祉除雪実施事業の内容が以下のように決定した。

平成 12 年度：「札幌市の福祉除雪を考える市民委員会」福祉除雪実施事業の要旨

基本認識

- ・ 市民・事業者・行政がそれぞれの役割を果たし、協働による事業として推進する。
- ・ 地域の支え合い活動として、既存の担い手に限らず幅広い市民の参加を得て実施する。
- ・ 福祉除雪を単なる除雪作業とせず地域福祉活動を推進する事業として位置づける。

実施地区

- ・ 市内 90 地区中、20 地区で試行的に実施する。選定する地区は高齢者人口の多い地域やボランティア活動の活発な地域とする。

実施形態

- ・ 地域協力員型：実施主体 - 札幌市、札幌市社会福祉協議会
- ・ 地域協力員を確保できる地域は地域の支え合い活動として実施する。間口及び敷地内の除雪のほか、地域協力員は必要に応じて声かけや安否確認を行う。
- ・ 行政発注型：実施主体 - 札幌市
地域協力員を確保することが困難な地域は、行政が除雪業者に作業を発注する。除雪業者は間口部分のみを除雪する。

2) 札幌市福祉除雪事業の概要

前項1)の背景を基に、平成13年度から札幌市全域において福祉除雪事業が実施されることとなった。札幌市では、福祉除雪事業を「地域における支え合い活動」と位置づけ、「福祉除雪を単なる除雪作業に終わらずに地域福祉活動を推進する事業」として展開しており、事業の概要は以下のとおりである。

< 札幌市における福祉除雪事業の概要 >

対象となる世帯

道路に面している一戸建ての住宅に住み、約500m以内に除雪を援助できる子ども又は子どもの配偶者が居住していない世帯で、以下のいずれかに該当し、自力で除雪することが困難と認められる世帯。ただし、二世帯住宅等で間口を共有している場合は、それらをひとつの世帯とみなす。

- (1) 70歳以上の者だけで構成されている世帯
- (2) 重度(1、2級)の身体障がいのある者だけで構成されている世帯
- (3) 70歳以上の者と重度の身体障がいのある者だけで構成されている世帯
- (4) 区社会福祉協議会が特に認めた世帯

「区社会福祉協議会が特に認めた世帯」とは、以下に例示されるような世帯である。

- ・ 重度の知的障がいのある者または精神障がいのある者だけで構成されている世帯
- ・ 中度(3・4級)肢体不自由者または内部障がいのある者だけで構成されている世帯
- ・ 重度身体障がいのある者と高齢の病弱者だけで構成されている世帯
- ・ 重度身体障がいのある者と学齢児童以下の者だけで構成されている世帯
- ・ 介護保険のサービスを利用している者だけで構成されている世帯

除雪の内容

(1) 除雪する場所

間口部分(道路に面した出入口部分)は概ね幅1.5m、敷地内については間口から玄関先までの通路部分で歩行に支障がない程度(概ね80cm)。間口部分の除雪は1箇所のみとし、車庫前は除く。ただし排雪は行わず、歩道除雪路線については歩道と車道の間は除雪しない。

(2) 除雪する日時

道路除雪が行われた日に実施し、実施時間はその日の正午頃までとし、利用者からは時間の指定はできない。なお、大雪等やむを得ない場合には、時間の遅延がありえる。

(3) 除雪回数

除雪の実施は原則として1日1回とする。

(4) 除雪を実施する期間

平成18年12月1日(金)～平成19年3月25日(日)(平成18年度の場合)

利用の際の負担金

世帯の課税状況区分により、一冬あたりの負担金を決定する。

市民税非課税世帯	・・・	5,000 円
市民税課税世帯	・・・	10,000 円
生活保護世帯	・・・	無料

「市民税非課税世帯」とは、世帯全員に市民税がかかっていない世帯。

申込方法

利用を希望する者は、居住区の社会福祉協議会、区役所の保健福祉課、地区のまちづくりセンターで配布する所定の利用申込書に必要事項を記入のうえ提出。

申込期間

平成 18 年 9 月 1 日（金）～10 月 4 日（水）（平成 18 年度の場合）

図表 1 - 55 除雪範囲イメージ図



3) 地域協力員

福祉除雪事業の利用を申し込んだ世帯に対しては、除雪作業を担当する地域協力員が割り当てられる。地域協力員の応募要件は以下に示すとおりである。

地域協力員の要件として、除雪の実施日に作業を行うことができる個人、グループ、企業などが挙げられているが、実際には当該地区に居住する住民が主体となって実施されている。平成17年度の地域協力員の内訳は、図表1-56のとおりであり、「地域組織」、「学校等」、「福祉施設」、「NPO等」、「地域企業」、「災害防止協力加盟企業」に所属する者となっている。最も大きな割合を占めるのが「地域組織」に所属する者、すなわち居住地区の社会福祉協議会で採用された一般住民である。また、地域協力員の作業内容には、除雪作業のみでなく、担当世帯の住民の安否確認も含まれている。

< 地域協力員の応募要件 >

(1) 地域協力員になれる者

除雪の実施日に作業を行うことができる者（個人、グループ、企業など）。

(2) 除雪作業の内容

福祉除雪の実施期間、間口及び敷地内の除雪作業。

(3) 担当世帯

福祉除雪の申込み世帯と、地域協力員を希望される者の住所を考慮の上、区社会福祉協議会で担当世帯を決定。なお、利用申込状況により担当世帯がない場合もある。

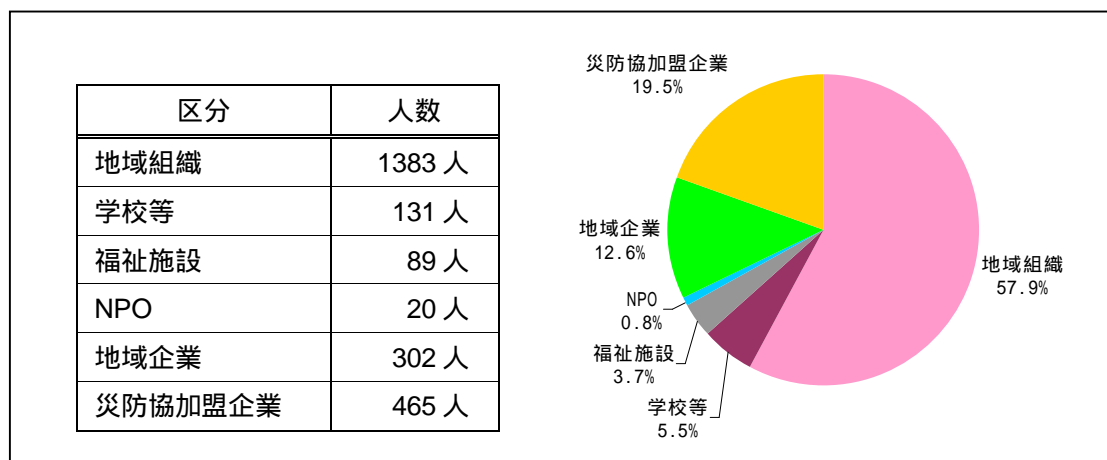
(4) 登録・申込み

居住する区の社会福祉協議会。

(5) 報酬

一冬1世帯あたり21,000円。

図表1-56 札幌市における地域協力員の内訳（平成17年度）



4) 福祉除雪事業実施までの流れ

福祉除雪事業実施までの大まかな流れは、利用希望者の申し込み 審査 利用希望者の居住地に合わせた地域協力員の配置 除雪実施、となる。これら一連の流れで中心となるのは、地区の社会福祉協議会であるが、窓口として重要なのは、地域に密着した「連合町内会」と「まちづくりセンター」であり、連合町内会やまちづくりセンターが地域の利用希望者及び地域協力員のとりまとめを行っている。

除雪終了後、地域協力員は「活動結果連絡票」を担当世帯に提出し、利用者が必要事項を記入した後、地域の社会福祉協議会に提出される。

【調査メモ】 福祉除雪サービスに関するヒアリング調査結果

日時：平成 18 年 12 月 12 日 15:00～

場所：札幌市中央区大通西 19 丁目 札幌市社会福祉総合センター

対象者：社会福祉法人札幌市社会福祉協議会 地域活動部

地域福祉課長 馬場氏、 地域福祉係長 辻氏

内容：

「福祉除雪サービス」の概要

- ・高齢者や障害のある方が外出するときに支障となる、道路に面した出入り口部分(間口)と玄関先までの通路部分(敷地内)を地域の協力員が除雪する事業。

現状

- ・札幌市全体で現在約 4,000 名弱の方が利用している。
- ・地域組織協力員ではなく、企業などの地域組織外協力員による除雪作業が 50%を超えている。
- ・9 月 1 日～10 月 4 日の間に利用申し込みを受け付けるが、実際にはそれを過ぎても申込者がいる。また、3 月 25 日に除雪作業は終了するが、次年度に向けての準備がすぐに始まるため、実際には通年事業となっている。
- ・利用申し込み終了の 10 月上旬からサービスが開始される 12 月 1 日まで 2 ヶ月弱しかない。その間に地域協力員への依頼、地域組織外協力員への依頼、利用申込者の審査、協力員の配置調整など多くの作業があり、時間的な余裕がない。

5) 札幌市福祉除雪事業における問題点と対応策の検討

札幌市福祉除雪事業の利用世帯数と地域協力員数の推移は、図表 1 - 57 のようになっている。平成 13 年度以降、利用世帯数は着実に増加しているものの、地域協力員数は平成 14 年をピークに減少している。福祉除雪事業利用者世帯は、近年の高齢化の進展から、今後も増加傾向が続くと予想され、将来的に福祉除雪事業の担い手不足が懸念される。

地域協力員数の構成別にみた推移は、図表 1 - 58 のとおりであり、「地域組織」に所属する地域協力員数の減少が著しく、それを補う形で「地域企業」に所属する地域協力員数が増加してきている。

また、「地域組織」の地域協力員は、事業利用者と同じ地域に居住する一般の者であり、高齢者であることが多く、福祉除雪事業の担い手も高齢化により不足しつつあることが指摘される。

以上より、札幌市における福祉除雪事業の問題点は、以下の 2 点に集約することができる。

札幌市における福祉除雪事業の問題点

福祉除雪事業に関する担い手問題

福祉除雪事業利用者世帯は、平成 13 年の事業開始以来、着実に増加している。一方、地域協力員の数は減少しており（特に「地域組織」の地域協力員）、それを「地域企業」が補う形となっている。「地域における支え合い活動」及び「福祉除雪を単なる除雪作業に終わらせずに地域福祉活動を推進する事業」という福祉除雪事業のコンセプトから、「地域組織」に属する地域協力員の増加が望まれる。

「地域の支えあい」、「地域福祉活動の推進」

の福祉除雪事業の担い手不足に通ずるが、「地域の支えあい」や「地域福祉活動の推進」に寄与するような人材の育成・確保が必要である。

このように、「地域組織」に所属する地域協力員の増加が課題であるが、実際は高齢者が多く、今後の福祉除雪事業の担い手としては現実的に厳しい状況にある。

福祉除雪事業は、基本的に降雪があった（除雪車が出勤した）日の午前中に行われなければならない。つまり、出勤・通学前に除雪を行う必要があり、比較的時間に余裕のある者が地域協力員とならざるを得ない。このことから実質的な地域協力員の担い手候補としては

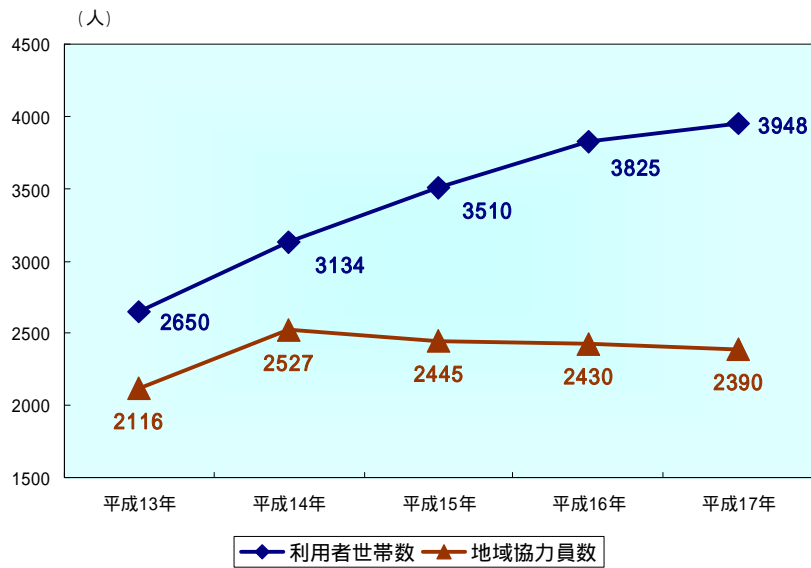
- ・ 比較的時間に余裕がある退職者
- ・ 比較的時間に余裕がある主婦
- ・ 比較的時間に余裕がある学生

があげられる。ただし学生の場合は、その地域に長く居住することが少ないことに留意する必要がある。そこで、課題解決の方向としては、

- ・ 比較的時間に余裕がある退職者 + 比較的時間に余裕がある主婦
- ・ 上記を補う学生ボランティア

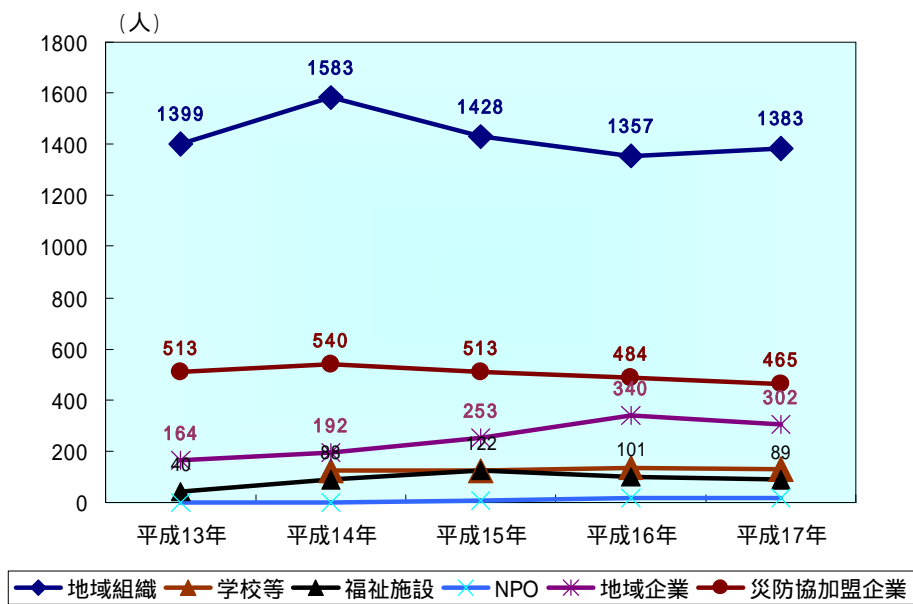
という構図が考えられる。

図表 1 - 57 札幌市福祉除雪事業 利用者世帯数と地域協力員数の推移



資料：札幌市社会福祉協議会

図表 1 - 58 札幌市福祉除雪事業 地域協力員数を構成別にみた推移



資料：札幌市社会福祉協議会

参考として、地域協力員の構成を地区別みると、図表 1 - 59 のとおりである。厚別区、南区、手稲区などは、札幌市の中でも「地域組織」に所属する地域協力員の割合が比較的高く、「学校等」の割合が高い区としては、清田区、南区が挙げられる。

図表 1 - 59 各区の地域協力員の構成 (平成 17 年度)

	地域組織	学校等	福祉施設	NPO	地域企業	防災協加盟 企業	合計
中央区	43	0	3	0	14	78	138
	31.2%	0.0%	2.2%	0.0%	10.1%	56.5%	100.0%
北区	189	4	9	3	58	10	273
	69.2%	1.5%	3.3%	1.1%	21.2%	3.7%	100.0%
東区	153	0	12	0	56	61	282
	54.3%	0.0%	4.3%	0.0%	19.9%	21.6%	100.0%
白石区	27	0	0	0	76	42	145
	18.6%	0.0%	0.0%	0.0%	52.4%	29.0%	100.0%
厚別区	69	0	0	0	7	9	85
	81.2%	0.0%	0.0%	0.0%	8.2%	10.6%	100.0%
豊平区	120	0	7	0	21	89	237
	50.6%	0.0%	3.0%	0.0%	8.9%	37.6%	100.0%
清田区	98	6	8	14	21	0	250
	39.2%	4.1%	3.2%	5.6%	8.4%	0.0%	100.0%
南区	325	18	0	0	4	77	424
	76.7%	4.2%	0.0%	0.0%	0.9%	18.2%	100.0%
西区	215	0	50	3	34	66	368
	58.4%	0.0%	13.6%	0.8%	9.2%	17.9%	100.0%
手稲区	144	0	0	0	11	33	188
	76.6%	0.0%	0.0%	0.0%	5.9%	17.6%	100.0%
合計	1383	131	89	20	302	465	2390
	57.9%	5.5%	3.7%	0.8%	12.6%	19.5%	100.0%

資料：札幌市社会福祉協議会

(2) 澄川地区における中学生の福祉除雪ボランティア活動

1) 澄川中学校における福祉除雪ボランティアの概要

札幌市南区澄川地区では、平成13年度より澄川中学校の生徒がボランティアで高齢者世帯の間口及び敷地内の除雪を行っており、活動の概要は以下のとおりである。

< 澄川中学校における福祉除雪ボランティアの概要 >

作業内容

札幌市福祉除雪事業における地域協力員と同様。

作業場所

社会福祉協議会が、福祉除雪事業利用希望者(該当者)と中学生ボランティアとの住居を考慮して決定。

作業時間

除雪車が出動した翌日、あるいは当日の朝、登校前に行く。

報酬

報酬については、地域協力員と同等ではなく、あくまでボランティアということで、図書券を配布する。

参加者数

平成18年度は合計12名であり、図表1-60のとおり。中学3年生は受験があるため、2年生が中心であるが、1年生から参加する者もいる。

図表1-60 澄川中学校の中学生ボランティア数(平成18年度)

(人)

性別	学年			総計
	1年生	2年生	3年生	
男性	3	5	1	9
女性	1	2	0	3
総計	4	7	1	12

2) 札幌市南区澄川地区社会福祉協議会へのヒアリング調査

澄川中学校の生徒による福祉除雪ボランティアは、「地域(札幌市南区澄川地区社会福祉協議会)」、「澄川中学校」、「生徒・その親」の3者が連携することで成立している。そこで、活動の実態を把握するため、札幌市南区澄川地区社会福祉協議会と澄川中学校に対してヒアリング調査を実施した。調査結果は以下のとおりである。

【調査メモ】 札幌市南区澄川地区社会福祉協議会 ヒアリング調査結果

日 時：平成 19 年 1 月 24 日(水) 9:30～

場 所：澄川地区 まちづくりセンター

対象者：澄川地区社会福祉協議会 会長 大石昇司 氏

札幌市南区市民部 武田章憲 氏

内 容 (要旨):

- ・南区は、除雪について地域による対応が多い。約 74%が地域対応となっている。全市の平均は 40%弱である。
- ・南区の平均余命、高齢化率は、札幌市内でも 1 位である。
- ・地域協力員の高齢化も進み、老々除雪となっている。
- ・地域協力員の内容は二通りあるのではないかと。一つは、地域での支え合いを考えて地域協力員となっている場合、もう一つは小遣い稼ぎの感覚で地域協力員となっている場合である。
- ・地域協力員として出動できる層は、時間的制約からも決まってくるので、それも老々除雪の要因となっているのではないかと。
- ・福祉除雪ボランティアは家庭の協力がなくともうまくいかない。生徒が福祉除雪ボランティアに参加するかどうかは、家庭の環境にも大きく影響されるのではないかと。
- ・福祉除雪ボランティアに参加している生徒に、自宅でも除雪を行っているか尋ねると、「以前は行っていなかったが、福祉除雪ボランティアに参加してからは行うようになった」という答えが返ってきた。

【調査メモ】 澄川中学校 ヒアリング調査結果

日 時：平成 19 年 2 月 1 日(木) 13:30～

場 所：澄川中学校

対象者：札幌市立澄川中学校 校長 久末司朗 氏

澄川地区社会福祉協議会 会長 大石昇司 氏

札幌市南区市民部 武田章憲 氏

内 容（要旨）：

中学生による福祉除雪ボランティアの歴史

- ・澄川地区における中学生ボランティアの取組は平成 13 年から。
- ・社会福祉協議会による福祉除雪の取組があり、それが一般の方への呼びかけにつながり、澄川中学校への中学生による福祉除雪ボランティアの取組につながった。
- ・社会福祉協議会からの中学生による福祉除雪ボランティアの呼びかけに対し、澄川中学校として協力はしたが、福祉除雪ボランティアに関する具体的な準備等は、札幌市南区澄川地区社会福祉協議会が行った。

中学校としての関わり方

- ・中学校としては、生徒に対して福祉除雪ボランティアへの参加を一生懸命呼びかけるようなことはしていない。強制的なことがない分、長続きしていると考えられる。
- ・福祉除雪ボランティアに参加する中学生に関しては、教頭先生、教務主任の先生が俯瞰して運営している。
- ・福祉除雪ボランティアに参加する中学生を、どの家庭に配置するか、といった問題・手間は無い。

中学生による福祉除雪ボランティアが継続する理由

- ・毎年、福祉除雪ボランティア参加者で反省会を行っている。「自分が担当した家の方にお礼を言われたことが嬉しかった」、「シーズンの最後までやり遂げた達成感」などを述べる生徒が多い。「自分でやりきった」という達成感が最も大事。
- ・福祉除雪ボランティアに参加している生徒が、シーズンを通してやり遂げられるかは親の協力が重要。
- ・澄川地区で中学生による福祉除雪ボランティアが成功したのは、町内会が主体となり、澄川中学校に働きかけたことによるのではないかと。

中学生による福祉除雪ボランティアと地域との関わり

- ・苦勞して得る、お金では買えない価値のあるものを求めてほしい。これは何も福祉除雪ボランティアに参加することだけではなく、生徒一人ひとりの個性によって得られる場所は違う。部活動であってもよいし、勉強であってもよい。
- ・福祉除雪ボランティアに参加した生徒は、除雪のみならず、防災活動の担い手になりえるなど、様々な可能性がある。

(続き)

- ・福祉除雪ボランティアは生徒の自主性により運営されているが、その自主性は地域の取組により醸成されたもの。具体的な例としては、子育て支援、ふれあい音楽会 (3つの小学校の持ち回りにより開催) 4校合同のPTAによるコーラス、町内会の運動会 (毎年500人が参加) などが挙げられ、これにより地域の連帯感が生まれる。
- ・地域としては、地域を担える次の世代の人材育成を念頭においている。地域を担える可能性のある人材をたくさん作っておく。
- ・地域には防災のシステムがあり、訓練はするが、決して消防団ではない。防災のみならず他のことにも対応できるような柔軟な運営を心がけている。
- ・地域が子どもとどう接しているのか見えてこない、あるいは家庭 (親) が子供とどう接しているのか見えてこないようではいけない。何かあったときに、いつでも対応できる地域づくりが重要。
- ・子どもを育てることが親も育てることになる。親子で福祉除雪をする例などもある。
- ・ちょっとした活動の積み重ねがボランティアである。喜びを感じたら継続していく。除雪ボランティアにはそれがある。
- ・澄川地区に限らず、人材はたくさんいるが、地域としてどのように関わっていくかが継続していく秘訣である。

以上のヒアリング調査から、中学生の福祉除雪ボランティア活動を発展させていくためのポイントを要約すると、以下のとおりである。

中学生の福祉除雪ボランティア活動のポイント - ヒアリング結果から -

生徒の自主性

除雪ボランティアの募集に際して、澄川中学校は積極的な関与をしておらず、札幌市南区澄川地区社会福祉協議会と中学生とをつなぐ架け橋的な役割に過ぎない。生徒の応募に際しても、積極的に勧めることはせず、生徒の自主性に任せている。結果として、生徒自らの意志で参加しているため、1シーズンの作業を達成することができる。

親の協力

除雪ボランティアに参加した生徒が1シーズンやり遂げることができるかは、親の協力によるところが大きい。除雪ボランティアに参加した生徒が風邪を引いた場合のサポートなど親の理解がなければ除雪ボランティアを行うことは難しい。

上記 と を醸成する地域づくり

除雪ボランティアに自ら参加してみようと考えさせ、なおかつ親の理解を醸成するのは容易ではない。澄川地区では、札幌市南区澄川地区社会福祉協議会を中心に様々な地域活動を催し、地域としてのつながりを強固にし、 を創出するような地域づくりを行っている。澄川地区における除雪ボランティアは、あくまでも地域の活動の中の一つである。

3) 中学生の福祉除雪ボランティアに関するアンケート調査

澄川中学校の生徒による福祉除雪ボランティア活動について、他地域への適用可能性等を明らかにするため、アンケート調査を実施した。実施要領及び調査結果は以下のとおりである。

< アンケート実施要領 >

調査対象

- ・平成 18 年度の除雪ボランティア参加中学生：11 名
- ・除雪ボランティア参加者の親
- ・除雪ボランティア経験者（平成 16 年度参加）：18 名

調査方法

- ・郵送法にて発送・回収
- ・参加中学生及びその親へのアンケート調査票は、一つの封筒に入れ郵送し、一つの返信用封筒にて回収

調査期間

- ・配布日時：平成 19 年 2 月 23 日
- ・回収期日：平成 19 年 2 月 26 日

回収状況

- ・平成 18 年度の除雪ボランティア参加中学生：8（配布数 11）
- ・除雪ボランティア参加者の親：8（配布数 11）
- ・除雪ボランティア経験者（平成 16 年度参加）：5（配布数 18）

< 除雪ボランティア参加中学生及びその親のアンケート結果 >

回答者の属性

- ・中学生の回答は 8 人であり、女子の割合が少なく、3 年生が 1 名と少ない。
- ・親の回答者の属性は、全て 40 代の母親であった（図表略）。

図表 1 - 61 回答者（中学生）の属性

（人）

学 年	男	女	総 計
1 年生	2	1	3
2 年生	3	1	4
3 年生	1		1
総 計	6	2	8

クラブ活動への参加状況

- ・3年生の男子一人を除き、全てクラブ活動に参加している。
- ・参加頻度は平均で週 5.7 回 (最大 6 回・最小 4 回) であり、ほぼ毎日参加している。

図表 1 - 62 クラブ活動への参加状況

(人)

学年	性別	クラブ活動への参加		総計
		参加している	参加していない	
1年生	男	2		2
	女	1		1
2年生	男	3		3
	女	1		1
3年生	男		1	1
	女			0
総計		7	1	8

習い事の状況

- ・ほぼ全員が習い事をしており、頻度は平均で 1.3 回 (最大 7 回・最小 1 回) であった。

図表 1 - 63 習い事の状況

(人)

学年	性別	習い事		総計
		している	していない	
1年生	男	2		2
	女	1		1
2年生	男	2	1	3
	女	1		1
3年生	男	1		1
	女	1		1
総計		7	1	8

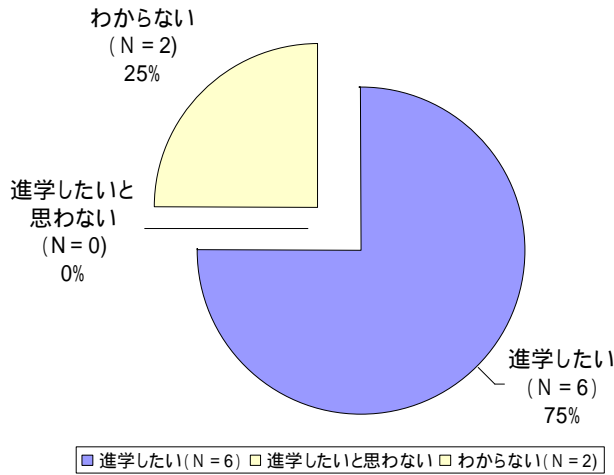
【考察】

「クラブ活動への参加状況」、「習い事の状況」は、除雪ボランティアを行う上で、マイナスの要因となるのではないかと、という想定のもとに尋ねた質問であるが、除雪ボランティア参加者であっても、クラブ活動や習い事を行っており、他の除雪ボランティアに参加していない中学生と比較しても、極端に異なる値であるとは考えにくい。中学生としての日常生活を送りつつ除雪ボランティアに参加しており、ボランティアに対する意識や地域に対する愛着の強い人が参加しているものと考えられる。

進学意志

・「進学したいと思わない」の回答は皆無であった。

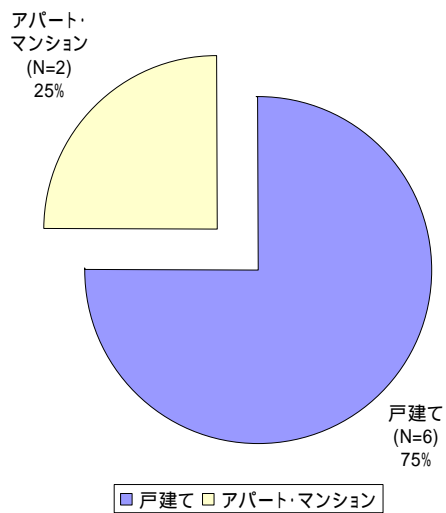
図表 1 - 64 進学意志



居住形態

- ・ 6 名が戸建てに居住している。
- ・ 居住年数は平均で 7.8 年（最大 15 年・最小 0.5 年）であった。

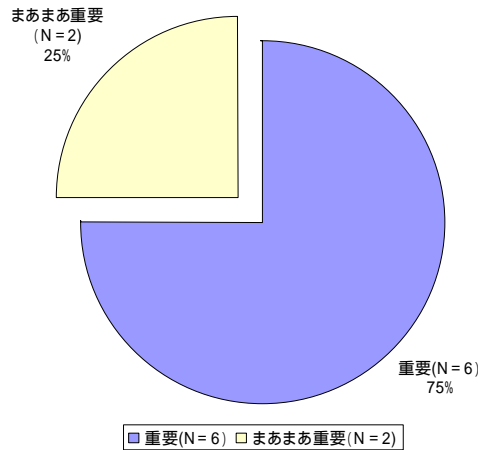
図表 1 - 65 居住形態



地域活動に関する評価

- ・地域活動について 5 段階評価で尋ねた結果、全ての回答者が「重要」もしくは「まあまあ重要」と回答している。

図表 1 - 66 地域活動に関する評価



【考察】

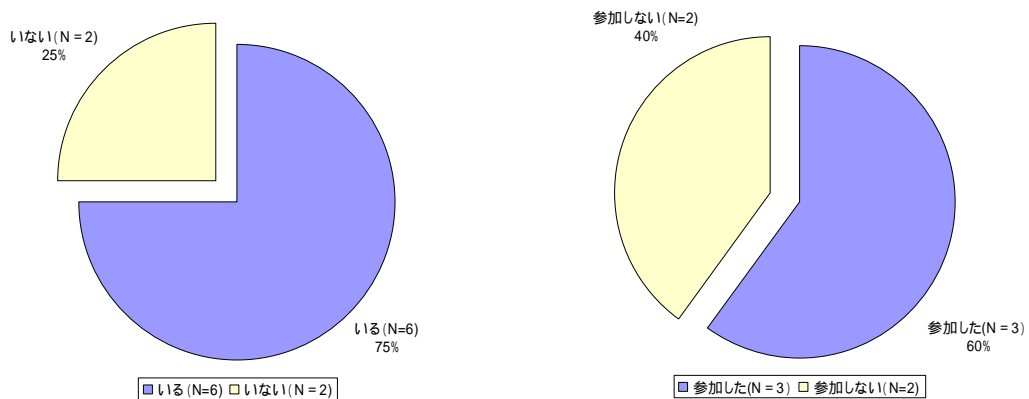
居住形態、居住年数、地域活動に関する評価等から、比較的長期にわたって居住している者が多く、地域に愛着があり、その結果が地域活動に対する意識の高さにつながっているものと考えられる。

また、除雪経験に関する設問では、1 世帯を除き、除雪の必要があり、全ての世帯で子供 (= 中学生ボランティア) が除雪を行うことがある、という結果が得られている。

家族のボランティア参加経験

- ・家族にボランティア経験がある中学生は 6 名と多い。
- ・家族と一緒にボランティアに参加したことがある中学生は 3 名であった。

図表 1 - 67 家族のボランティア参加経験



ボランティア参加経験のある家族の有無

家族とボランティアに参加した中学生の割合

除雪ボランティアをはじめたきっかけ

- ・「高齢者や障がいのある方を助けたかったから」や「体力づくり・健康のため」といった能動的な理由と、「友人・知人からのすすめ」、「友人が参加しているから」、「家族からのすすめ」といった受動的な理由が混在している点が特徴的である。
- ・「先生からのすすめ」という回答はない。

図表 1 - 68 除雪ボランティアをはじめたきっかけ（複数回答）

	1年生		2年生		3年生		総計
	男	女	男	女	男	女	
高齢者や障がいのある方を助けたかったから	1	1		1	1		4
興味があったから	1			1			2
体力づくり・健康のため	1	1	1				3
先生からのすすめ							
友人・知人からのすすめ			1				1
友人が参加しているから				1			1
家族からのすすめ		1	1				2
なんとなく			1				1
総計	3	3	4	3	1	0	14

親の除雪ボランティアに対する評価とその理由

- ・除雪ボランティアの制度についての5段階評価とその理由を尋ねた。1名が「どちらとも言えない」と回答した以外は、「良い」、「まあまあ良い」と回答しており、評価は高い。
- ・評価の理由では、「地域に入っていやすい」、「高齢者が多い地域」、「地域との関わりをもってほしい」など地域について触れている記述が多くみられた。

図表 1 - 69 親の除雪ボランティアに対する評価とその理由

評価	評価の理由
良い	地域で支えあうのは良いことだと思います。
	他人の役に立つ、感謝されるという体験。地域の人に“見られている”、“見守られている”という環境の中で成長することは子どもの心の教育で、とても大切なことと考えるので、これからも継承するべきと思います。 親が活動していると子供も地域に入っていやすいと思います。
	高齢者の多い地域なのでいいことだと思います。
	除雪をすることで地域の人と係わりをもってほしいと思ったので。
まあまあ良い	何回か行くうちに要領は得てきましたが、最初はどの程度の雪で行くのか、1日に1度で本当に大丈夫なのか、安否確認とは・・・？と、とまどう事が多かったです。今年は雪が少なかったようですが良い経験になったと思います。
	今年はボランティアに参加しました。受験生ということもあり、親も出動しましたがよい経験になったようです。何人かで組んでできたら良いです。一人だと大変だと思います。
どちらとも言えない	残念なことに中学生の参加人数が少ない。 本当に必要とされている家に行っているのかと思う。

除雪ボランティアをされていてよかったこと

- ・最も多い回答が「作業した世帯の方に喜ばれた・感謝されたこと」であり、「自分が担当した世帯の方と交流できたこと」、「地域のためになれたこと」、「体力・健康づくりに役だったこと」が続く。
- ・「除雪ボランティアをされていて困ったこと」として、全員が「早起きが辛かったこと」と答えている（図表略）

図表 1 - 70 除雪ボランティアをされていてよかったこと（複数回答）

	1年生		2年生		3年生		総計
	男	女	男	女	男	女	
作業した世帯の方に喜ばれた・感謝されたこと	2	1	2	1	1		7
自分が担当した世帯の方と交流できたこと	1		1		1		3
地域のためになれたこと	2		1				3
体力・健康づくりに役だったこと	1	1	1				3
特になし							
その他							
総計	6	2	5	1	2	0	16

除雪ボランティアの継続意向とその理由

- ・除雪ボランティア参加中学生に対して、今後の継続意志についての5段階評価とその理由を尋ねた。1名が「あまり思わない」と答えた以外は、「思う」または「まあまあ思う」と答えている。
- ・理由をみると、受験のために継続が難しい状況がうかがえる。

図表 1 - 71 除雪ボランティアの継続意向とその理由

継続の意志	理由
思う	地域や除雪をした世帯の方のためになれたことがうれしかったから。
	部活・塾と毎日大変ですが自分にまけることなくがんばりたいため。
まあまあ思う	今年は受験なので、活動できるかわかりません。
	またやってもいいと思ったから。
	その担当している人に「ありがとう」といわれると、うれしくなるし、また次もがんばるぞとやる気が出るから。
	少し早起きが辛かったので。でも良いことをするのに悪いことはぜったいないので。早く起きて体を動かしたかったから。
あまり思わない	4月から受験生なので。

中学生の福祉除雪ボランティア活動のポイント - アンケート結果から -

除雪ボランティアに参加している中学生とその親に対するアンケート結果を踏まえ、「札幌市南区澄川地区社会福祉協議会」及び「澄川中学校」のヒアリング結果から得られた活動のポイントである「生徒の自主性」「親の協力」「を醸成する地域づくり」の3点から要点を整理すると、以下のとおりである。

生徒の自主性

アンケート結果から、先生からのすすめにより除雪ボランティアに参加した回答者はいなかった。また、参加理由としては、能動的な理由と受動的な理由が混在していた。地域やボランティアに対する意識は高いが、周囲のすすめも除雪ボランティアを始める上で重要であることが指摘できる。

親の協力

アンケート結果から、除雪ボランティアに参加する中学生の親は、地域に対する意識が高いと考えられる。また、親に限らず、家族がボランティアへの参加経験を有する場合もあり、地域やボランティアに対する関心の高さがみられた。

上記 と を醸成する地域づくり

親のボランティアや地域に対する関心の高さや除雪ボランティアに参加している中学生の地域に対する愛着などから、澄川地区では地域活動やボランティアに対する意識の高い人材が育成されているものと推察される。

アンケート結果に基づく問題点

アンケート結果から指摘される問題点として、中学生による除雪ボランティアの継続性がある。札幌市福祉除雪事業の利用者は、安心感などの面で同一人物による経年的な除雪を希望する傾向にある。しかし中学生の除雪ボランティアの場合、年数が限られているとともに、受験に備えて3年生の参加が難しく、継続的な活動は困難であるのが実情である。

< 除雪ボランティア経験者のアンケート結果 >

回答者の属性

- ・現在澄川地区に居住しており、平成 16 年度に除雪ボランティアに参加していた高校生。
- ・回答者はすべて 16 歳であり、男 3、女 2、合計 5 名の回答が得られた。

除雪ボランティアをして良かったこと

- ・傾向としては、現在、除雪ボランティアに参加している中学生と同様、「作業した世帯の方に喜ばれた・感謝されたこと」、「自分が担当した世帯の方と交流できたこと」、「地域のためになれたこと」が挙げられている。
- ・「その他」は内申書に書くことがらが出来た、ということであった。

図表 1 - 72 除雪ボランティアをして良かったこと (複数回答)

	男性	女性	総計
作業した世帯の方に喜ばれた・感謝されたこと	3	2	5
自分が担当した世帯の方と交流できたこと		1	
地域のためになれたこと	1	2	3
体力・健康づくりに役だったこと			
特になし			
その他		1	1
総計	4	6	9

除雪ボランティアをしていて困ったこと

- ・1 名が「除雪した世帯の方とうまくコミュニケーションがとれなかったこと」と回答。
- ・その他では、「雪を捨てる場所が少なかった」、「除雪した雪の置き場(に困った)」、「インターホンを鳴らしても出てこなかった(TVの音は聴こえていたのに)」であった。

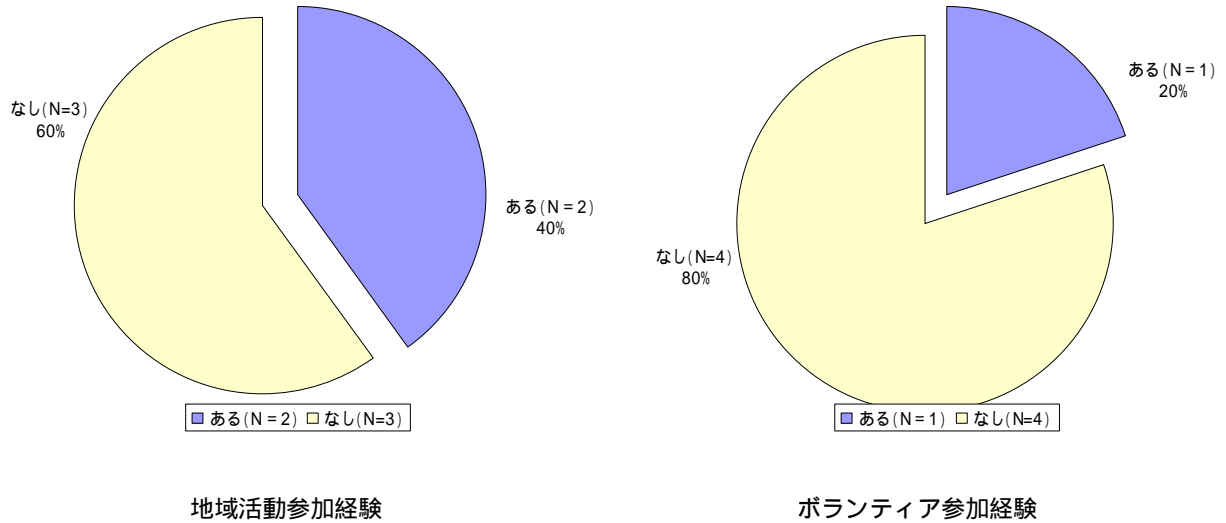
図表 1 - 73 除雪ボランティアをしていて困ったこと

	男性	女性	総計
除雪した世帯の方とうまくコミュニケーションがとれなかったこと	1		1
除雪作業が体力的に辛かったこと			
早起きが辛かったこと	1		1
自分が希望する世帯を担当できなかったこと			
世帯の方への声かけが面倒だったこと			
その他	1	2	3
総計	3	2	5

除雪ボランティア以前の地域活動およびボランティア経験

- ・地域活動、ボランティア活動ともに参加経験のある者はそれほど多くない。

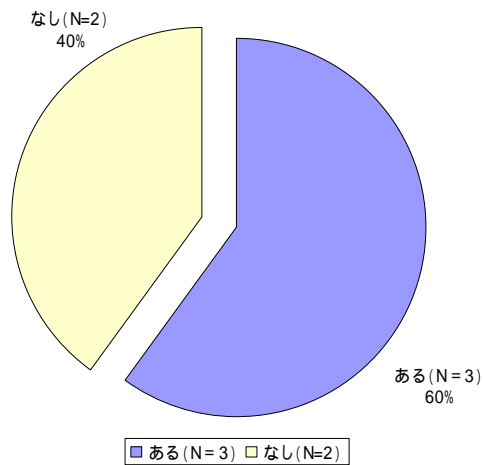
図表 1 - 74 除雪ボランティア以前の地域活動及びボランティア経験



地域活動やボランティアへの参加意向

- ・参加意向のある回答者は3名であり、全員ではない。

図表 1 - 75 地域活動やボランティアへの参加意向



除雪ボランティア後に変化したこと

- ・ 除雪ボランティアに参加することで、地域活動、ボランティア活動に関心を持つようになる、地域に愛着を持つ、などの変化がみられ、将来的に地域を担う人材育成にも寄与していることがうかがえる。
- ・ その他の1名は「これからもボランティアを行っていきたいと思った」と回答している。

図表 1 - 76 除雪ボランティア後に変化したこと

	男性	女性	総計
地域活動・ボランティアに参加するようになった		1	1
地域活動・ボランティアに興味を持つようになった		1	1
地域に対して愛着を持つようになった	1	1	2
特になし	1		1
その他	1	1	2
総計	3	4	7

【考察】

除雪ボランティアを行う際に困ったこととして、「除雪した世帯の方とうまくコミュニケーションがとれなかったこと」、「インターホンを鳴らしても出てこなかった(TVの音は聴こえていたのに)」が挙げられた。

一方、除雪ボランティアをしていて良かったことでは、現役の中学生除雪ボランティア及び除雪ボランティア経験者ともに「作業した世帯の方に喜ばれた、感謝されたこと」や「自分が担当した世帯の方と交流できたこと」を挙げている。

この「感謝」や「交流」は、除雪ボランティアを持続する上で極めて重要であり、参加者が充実感を実感できるような除雪ボランティア制度の運営が求められる。

(3) 札幌市福祉除雪事業における「澄川モデル」の適用可能性

以上の調査結果及びアンケート結果から、札幌市における福祉除雪事業の問題点(63頁参照)に即して、中学生が福祉除雪ボランティア(地域協力員)として活躍する「澄川モデル」の適用可能性等について、以下のとおり検討を行った。

澄川地区の福祉除雪事業に関するまとめ

福祉除雪事業に関する担い手問題

中学生ボランティアの場合、受験等で継続的に行うことが難しい。福祉除雪事業の利用者としては、継続的に作業してもらえのほうが安心できる。そのため、同一人物による除雪は無理でも、先輩から後輩への引き継ぎをスムーズに行うことにより、中学生と利用者の双方が効率的かつ安心して福祉除雪事業に携われるなどの体制を確立する必要がある。

「地域の支えあい」、「地域福祉活動の推進」

将来の福祉除雪事業の担い手として、地域福祉に関心を持つような人材を育成することが重要である。澄川地区の場合、様々な地域活動がなされており、ある程度、地域に対する関心の高い住民が育成されていると考えられる。

アンケート結果では、除雪ボランティアを始めるきっかけとして、家族のすすめなど受動的な動機と高齢者や障がいのある方を助けたかったからという能動的な理由が混在している。また、親の除雪ボランティアや地域福祉に対する意識も高いことから、地域に対する関心の高い住民が育成されていることがうかがえる。

除雪ボランティア参加後に地域活動やボランティアに対する関心や意欲が高まったり、地域に愛着を持つようになるなどの変化もみられ、中学生による除雪ボランティア活動は、将来に向けた福祉除雪事業の担い手育成に寄与しているものと推察される。

福祉除雪事業における澄川モデルの適用可能性

- 中学生による除雪ボランティア活動は、登校前に除雪作業を行うため、除雪場所等の制約が大きいこと、また澄川中学校においても参加者が限定的であることから、中学生を地域協力員の減少を補うものと位置づけることは難しい。地域協力員数の減少に対処するという近視眼的な視点ではなく、将来の地域協力員として「地域の支えあい」及び「地域福祉活動の推進」を担う人材の育成として、中学生ボランティア活動を実施していくほうが効果的である。
- 中学生による除雪ボランティアを推進するためには、親も含め、地域に対する関心の高い人材が居住していることが必要であり、澄川地区では、地域の様々な活動を通じてそれを醸成している。したがって、多様な地域活動を展開することにより、その地域を担う人材を育成するような環境づくりが必要条件となる。

1 - 5 北海道部会における成果(総括)

北海道部会において実施してきた検討会議、事例調査、実証実験の結果等に基づき、北海道部会の検討課題別に、本調査の成果及び今後の方向性を総括・整理すると、以下のとおりである。

課題 1 (実証実験)	高齢者世帯の空き部屋を利用した交流と除雪支援の仕組みを構築する 「ホームステイ型除雪支援実験」
<ul style="list-style-type: none"> ● 実証実験として、道外の若者(留学生4名)が札幌市内の高齢者宅でホームステイを行い、その家屋周辺の除雪作業を行った。 ● 北海道(札幌市)において、「ホームステイ型除雪支援」の仕組みを構築するにあたり、以下の点が明らかとなった。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ホームステイ制度に登録しているホストファミリーは、あくまでも交流を目的に登録しており、健康面や経済的側面から除雪支援を特段必要としない家庭が多い。 ・たとえ除雪目的であっても、ホストファミリーの経験がない高齢者家庭がゲストを受け入れることは、過度の心身の負担となり、現実的とはいえない。 ・しかし、ゲストがホームステイ先で除雪を行うことについては、「異文化理解」や「交流」を深めるきっかけになることが明らかとなった。 ・さらに、実証実験に参加したホストファミリーの中には、ゲストの除雪によって「助かった」等の感想もあったことから、このような除雪支援は、特に高齢のホストファミリーにおいて、潜在的なニーズがあるものと考えられる。 </div> <p>【今後の課題と方向性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「ホームステイ型除雪支援」を実現するためには、ホストファミリーの意識改革が重要と考えられる。つまり、「<u>除雪</u>」が「<u>異文化理解</u>」や「<u>交流</u>」を深めるきっかけとして有効であるととも、日常の除雪作業の負担が軽減されることを、ホストファミリーが前向きに評価することが必要である。 ● 今回の実験では、ゲストと一緒に隣近所の高齢者宅の間口除雪をしたホストファミリーがあった。ゲストの除雪(ボランティア除雪)をきっかけに、<u>ホストファミリーの近隣で除雪を必要としている家庭に対する除雪支援の必要性を見いだし、ホストファミリー自らが地域除雪を担う立場として活動していくことも期待され、引き続き検討する予定である。</u> ● 最初から「ホームステイ」を前提としたプログラムのみではなく、「ホームビジット」による除雪支援プログラムを導入し、除雪支援側と被支援側のコミュニケーションが深まった段階で、「ホームステイ」に移行できるような仕組みの検討が望まれる。 	

課題 2
(実証実験)

地方の高齢者世帯の除雪支援を行う仕組みを構築する

「ホームビジット型除雪支援実験」

- 札幌在住者及び道外観光客によるホームビジット型の除雪支援ツアーを実施し、地方部の高齢者世帯の除雪作業を行った。
- 実施実績
 - ・「雪はね体験隊！」(体験・交流型) H19.2.17 上富良野町 参加者 29 名
 - ・「雪かきボランティア」(支援型) H19.2.14 岩見沢市栗沢町 参加者 10 名
- 参加者の満足度も高く、都市部の若者(特に大学生)が雪処理の担い手として有効であることも確認された。
- 北海道において、「ホームビジット型除雪支援」の仕組みを構築するにあたり、以下の点が明らかとなった。

- ・参加者の満足度は非常に高く、その大きな要因として、地元の受入側もボランティアとともに作業をするなど、お互いに時間を共有する中で交流が深まったこと、一人で除雪をするのではなく、まとまった人数で作業し連帯感が生まれたことが挙げられる。
- ・除雪ボランティアだけでなく、地元の受入側も含めた「参加者」の交流の密度が、プログラムの満足度を高めているものと考えられる。
- ・一方、このような「交流」を基本としたプログラムの企画・運営にあたっては、参加者の意向や受入側のニーズを適切にマッチングさせることや、気象状況を見ながら除雪作業の内容を含めたツアー全体のプログラムを構成するなど、プログラムのコーディネートが非常に重要である。

【今後の課題と方向性】

- 「ホームビジット型除雪支援」を実現するためには、プログラムをコーディネートする体制(組織)づくりが重要である。除雪ボランティアの募集、受入側のニーズに応じたスケジュール設計など、様々な役割を担うこととなり、関係機関とのスムーズな連携を図ることが不可欠となる。
- 「ホームビジット型除雪支援」は、短期的に成果を上げることが期待できる取組である。しかし一過性のボランティア活動で終わってしまい、必要とする地域にとっては継続性のある「担い手」に結びつかないという懸念もある。
- 「ホームビジット型除雪支援」に参加しても、普段の生活に戻ったときに、その体験を直接活かせる場がなければ、体験そのものが風化する可能性が高い。したがって、参加者を継続性のある「雪処理の担い手」として育成していくため、例えば札幌市福祉除雪事業といった、身近な地域でのボランティア除雪活動が受け皿となって、活動の場を提供するなどの連携的な仕組みづくりが望まれる。
- 今後も引き続き、有限責任中間法人シーニックバイウェイ支援センターが主体となって、除雪支援ツアーの実施・展開を進めていく(予定)

課題 3
(事例調査)

地域主体で実施している雪対策についてその実態を把握する

「地域主体の雪対策実態調査」

- 札幌市における福祉除雪事業の実態を調査し、問題点と対応策として、以下の点が指摘された。

札幌市における福祉除雪事業の問題点

福祉除雪事業に関する担い手問題

福祉除雪事業利用者世帯は増加傾向にあるものの、地域協力員の数は減少している(特に「地域組織」の地域協力員)。「地域における支え合い活動」及び「福祉除雪を単なる除雪作業に終わらせずに地域福祉活動を推進する事業」という福祉除雪事業のコンセプトを重要視するならば、「地域組織」に属する地域協力員の増加が強く望まれる。

「地域の支えあい」、「地域福祉活動の推進」

「地域の支えあい」や「地域福祉活動の推進」に寄与するような人材の育成・確保が必要である。

地域協力員確保の方向性

- ・ 比較的時間に余裕がある退職者 + 比較的時間に余裕がある主婦
- ・ 上記を補う学生ボランティア

- 札幌市澄川地区における中学生の福祉除雪ボランティア活動の実態を調査し、その実施効果を明らかにするとともに、「澄川モデル」の適用可能性を検証した。

・ 中学生を地域協力員の減少を補うものと位置づけることは難しい。地域協力員数の減少に対処するという近視眼的な視点ではなく、将来の地域協力員として「地域の支えあい」及び「地域福祉活動の推進」を担う人材の育成として、中学生ボランティア活動を実施していくほうが効果的である。

・ 中学生による除雪ボランティアを推進するためには、多様な地域活動が展開されており、それがその地域を担う人材を育成するような環境づくりが必要条件となる。

【今後の課題と方向性】

- 中学生による福祉除雪ボランティアは、単なる「地域協力員」の補助人員としてとらえるのではなく、福祉除雪事業が目指す「地域の支えあい」や「地域福祉活動の推進」を担う人材育成の一環として、長期的な視点で推進していくことが重要である。
- 今後も福祉除雪事業を持続させるためには、様々な方面で地域協力員を確保していくとともに、地域活動に積極的に関わっていく人を若い世代から確実に育てていく必要がある。中学生による福祉除雪ボランティアも、そのような人材育成を目的に、学校やPTA組織を巻き込んだ地域活動として推進していくことが重要である。